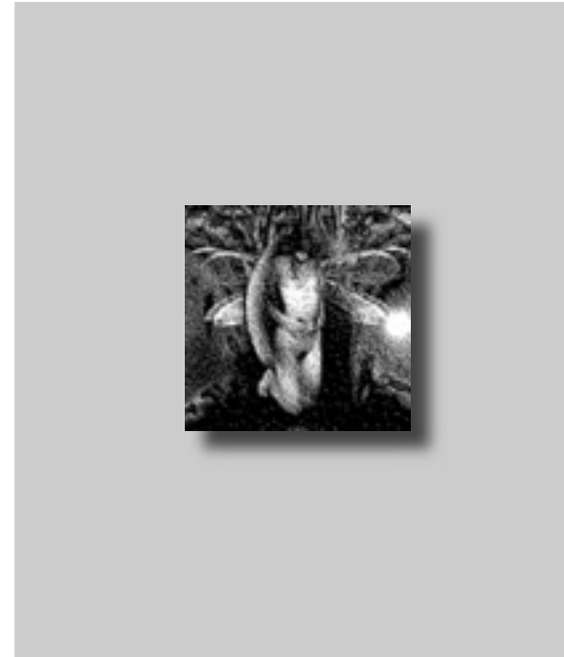
輪廻の遺伝子

りんねのいでんし



竹村倉二

目次

真言立川流 3
カンブリアシンドローム 4
阿字観 5
稲川乱造 9
短命種 10
誘拐 11
隠れ遺伝子 15
進化種 17
一族 19
飛翔 22
進化 26
復活 29
アスラ 34
世紀末 36
バイオハザード 40
弥勒の誕生 43
ミロク 45
布教 46
聖者たち 49
感染 52
変身 54
ウィルス 58
悪魔 59
始まり 61

真言立川流

10畳ほどの広さの薄暗い部屋の中。
裸の男が座禅を組んでいる。
だが一人ではない。
女がその男に絡みついている。
女は、小柄な体つきだが、汗ばんで光る豊満な胸と小気味よく盛り上がった尻が、妙に淫な印象を与える。
男は、女の腰を両手で抱え込んでいる。

女の体はしっとり汗ばんできて、鼻息も荒くなってきた。
そんな女の反応を確かめて、男は呪文を低く唱えだした。
「オン・キリク・ギャグ・ウン・ソワカ」
うなるような、ささやくような声で繰り返し唱えている。
男に「気」が走った。

その瞬間、女の頭は跳ね上がるようにそりあがった。
「ぐっ」
悲鳴に似たうめき声がもれる。
「オン・キリク・ギャグ・ウン・ソワカ」
「オン・キリク・ギャグ・ウン・ソワカ」
「オン・キリク・ギャグ・ウン・ソワカ」
男の呪文は、低い呟きに変わっていった。

彼は今、大きな月輪の中にいた。
彼の前には大日如来が結跏趺坐をしている。
「あなたは私の妄想ですか」
「私は私である」
大日如来の思念が真に届いてくる。
「私がいるからあなたが存在しているのではないのですか」
「私は私である」
「私がいなくても貴方は存在しますか」
「私は理である。理は存在ではない」
二人の問答は一時途絶えた。

不意に奇妙な音の固まりが、後ろから真に投げつけられた。
真は肩で受け止めた。
ずんという衝撃波は右肩の骨を粉砕した。
「むん!」
真は瞬時のうちに、金剛杵を両手に携えている。
目の前には、美しい女性が立ちはだかっている。
だだ、彼女の下半身はダチョウの足のような鳥の姿だった。
「セイレーンか」
彼女の口が大きく開く。
キーンという幻聴とともに高周波が真を襲う。

「ナウマク、サマンダバザラダン・カン」
真言を唱えると素早く九字を切り、金剛杵を盾とした。
高周波はあっけなく金剛杵の中へ吸い込まれていく。

セイレーンは、すばやく真上にジャンプする。
「ギャルルルルル・・・」
一声叫んだかと思うと、空間の中へ分散していく。
一時の静寂がおとずれる。

「ナウマク、サマンダバザラダン・カン」
「ナウマク、サマンダバザラダン・カン」
「ナウマク、サマンダバザラダン・カン」

真の真言は次第に高まっていく。
その瞬間、真の体は無限の原子に分解されていく。
「ウン！」
分解された原子の固まりの中から裂帛の気合いが響く。
霧散したものが、凝縮していく。
そのカオスの中から、激しく燃え上がる大火炎を背後にし、降魔の剣を右手に握りしめた不動明王が出現した。
それと同時にセイレーンも突然現れた。
よく見るとセイレーンの頭に蠢くものがある。
蛇だ。メディウサになっている。
その頭へいきなり、降魔の剣が振り落とされた。
声の出ぬまま、メディウサは股間まで、まっぷたつになった。

不動明王の背中の火炎が静かに消えていく。
いつの間にか真が結跏趺坐をしている。
すべてが闇になった。

カンブリアシンドローム

カルフォルニア海洋生物研究所。
一番奥の会議室では、主任科学者達を集めたミーティングが始まっている。
20名ほどであろうか、ほとんどの者が白衣を身につけている。
「先月、カリブ海沿岸で発見された、アノマロカリスの幼体についての報告があります。」
議長役のヘレンは、なめらかな口調で話し始めた。
「このアノマロカリスの幼体の発見は、現在はマスコミには公表されていません。更に先週、オバビニア、ウィワクシアの生体が同じ海域で発見されました。」
10人ほどの科学者は「オー・・・」と感嘆の言葉をもらした。
ヘレンは彼らの反応を無視して話を続けた。
「いずれも捕獲直前まで生きていたという証言があります。これを捕獲した地元の漁民は不思議な深海動物だと思ったようで、特別箝口令をしかなくてもよさそうですが、今週だけでも10件以上の未確認動物の発見が当研究所に寄せられています。ほとんどが海洋生物です。古生物アカデミーのドーキンズ博士と合同調査をした結果、いずれもカン

ブリア紀の古代生物であろうとの結論が出されました。」
「ヘレン博士。それらは原始帰り現象ですか」
若い眼鏡をかけた研究員らしき人物が質問をした。
「現在のところ不明です。ただ、この事は合衆国政府は重要秘密事項に指定されました。今日集まっていただいたのは、今後当研究所の研究内容は極秘扱いとなったことをみなさんに伝える為なのです」
「カンブリア生物が発見されたことは大問題だが、国家の機密事項にするほどのことかね」
大柄で白髪のグールド博士がヘレンの目をのぞき込むようにして尋ねた。
「そうです。現在、自然環境団体グリーンは絶大な力を政府への圧力として使い始めています。この手の話にグリーンが興味を示すとどういう扱われ方をするか、容易に想像が出来ます。ですから、これら発見された古代生物の調査が完全に行われ、正しい結論が出せるまで機密事項にするということです。ご承知いただけたでしょうか」
ヘレンは金髪の髪を掻き上げ、キッパリ話した。
「なるほど・・」
タナカ博士は頷いた。
「それにしても、カンブリア紀の古代生物とは驚きですな。もしかしたら、カンブリア爆発再来の予兆かもしれませんな。ダーウィンが生きていたらなんと説明するでしょうか・・」
語尾には冷笑が混じっている。
「最後にもう一つ報告があります。こちらはもっと重要だと思われます。実は昨日アフリカ研究所から例のチンパンジーの調査報告がありました。原因不明のウイルス性熱病で死んだ20体の猿の調査の結果、これらの猿の染色体の数はすべて46だったそうです。」
一同に驚きの声が漏れた。
「ということは、染色体数が人間と同じだったということですか。他に異常はなかったのですか。」
と初老のマクドナル博士が叫んだ。
「ありません。外見はただのチンパンジーだったとのことです。これらすべてのことは、まだ調査未定で極秘扱いです。この一連の現象を政府はカンブリアシンドロームと呼ぶようにとのことです。これで会議を終わります。」
ヘレンはあっけにとられている博士達を残し、足早にドアから出ていった。
会議室に残ったみんなは、ヘレンの素っ気ない対応に面食らったのか、立ち上がるタイミングを失い、話し始めた。
「カンブリアシンドロームか。確かに地球はたちの悪い病気にかかったかもしれないな。しかし5億年前絶滅した悪魔どもがよみがえるとは・・」
「それよりも猿の染色体の方が重大だ。進化の法則の問題だよ、これは」
残った科学者達は、顔を寄せ合い、ひそひそと話し続けていた。

カンブリア紀には爆発的に多様な種類の生物が誕生している。これをカンブリア爆発と呼んでいる。恐竜が生存していたジュラ紀より遙か古代である。このカンブリア紀の終わりには、現代の動物のすべての門が出そろっている。それ以前には地球にはおもだった生物は発見されておらず、カンブリア紀を境に一斉に多様な生物が出現している。さらにその形態は現在の生物と大きくかけ離れたものが多く詳しい内容までは解明されていない。一般的には生命史上たった一度の進化の大イベントともいわれている。

阿字観

立川真は武蔵野の山奥ある文殊寺の護摩壇の前で結跏趺坐をしている。
阿字観と呼ばれている瞑想である。阿字観とは密教の基本的な瞑想法である。この瞑想で得るものは強力な想像力だ。
真はゆっくりと目を開ける。目の前に女が座っている。

弘子である。紺色のスーツに縁なしの眼鏡をかけている。
「弘子か。」
「この前のトリップはどうでした。」
「ふむ。セイレーンとメディウサが現れた。こちらも不動明王になり退治した」
「ギリシャ神話ね。だいぶ瞑想が深かったみたいよ。自我意識のバランスはどう」
「意識が分裂していくところまでは制御できたが、完全にはコントロールできない」
「瞑想による、想像力の強化がフロイトのいう前意識のコントロールを可能にしたけれど、無意識の中までは無理だって事ね」
「セイレーンとメディウサは意識しなかったはずだ。大日如来という人格を作り上げた時に、何かのスイッチが入ったのかもしれない」
「まったく脳味噌には何が仕掛けられているのか想像がつかないわ」
「しかし急がなくてはならない。ヘレンからのEメールでは、カルフォルニア海洋生物研究所で箝口令がしかれたという。すでに本格的なカンブリアシンドロームが始まりつつある。いよいよ進化が顔を出してきたのだ」
「ヘレンさんからのメールが来たの？　元気にしているかしら、懐かしいわね」
弘子の語尾にすこし棘が生えた。
ヘレンは真の大学時代の恋人である。彼女のことは真から全て聞いているのだが、彼女の献身的な真への忠誠は、弘子も妬けることがある。
どういう恋愛だったのかはわからないが、二人は会わなくなってからも、連絡を取り合っている。恋人以上の肉親的感覚かもしれなかった。
（つまらない嫉妬はやめよう）
弘子は嫉妬を振り払った。

20畳もある板張りの霊窟は冷気に包まれている。
「弘子。研究所でコーヒーでも飲もうか。ここは寒すぎる」
この場所は九州の宮崎県にある高千穂峡の奥まったところにある古寺「天地寺」だ。高千穂といえば天孫降臨の伝説の地として有名なところである。頂上に「天(あま)の逆鉾」がある。天地寺はいつ建てられたのかもわかっていない。ただその源流は真言密教の最大の邪教といわれる真言立川流の本拠地なのである。真言立川流とは、鎌倉時代から南北朝にかけてはやった髑髏を本尊とする秘密教である。一般的には性魔術をベースにするといわれているが、事実はだいぶ違う。
この宗派の祖は平安末期の真言僧、仁寛（にんかん）とされている。
仁寛は天皇家の政争に加担して伊豆に流されている。そしてその地で投身自殺をしている。その後、後醍醐天皇に仕えた東寺の長者・文観（もんかん）がこの法を用いて世を惑わしたとして非難されており、ついに江戸時代には抹殺されてしまった。
「天地寺」はその立川流の秘密寺である。現在は一般には門を閉ざしており、訪れる人もいない。「天地寺」の奥社は背後の岩の洞窟にあり、霊窟と呼ばれている。本堂の脇にコンクリート3階建ての「宮崎自然科学研究所」があり、そこに住職が住んでいる。その住職が立川真（まこと）だ。
真は立川流を受け継ぐ真言僧である。3年前、祖父の文殊が胃癌で他界した際、アメリカのオックスフォード大学の助教授を辞め、この寺の跡を継いだのである。本来は父が住職をするはずだったが、真の能力を父が認め、無理やり住職としたのだった。彼の専門は生物学であるが、「自己繁殖する遺伝子」という論文で博士号を20才の時にとっている秀才だ。
彼の論文の主旨は進化に関することだ。生物にはすべての可能性があるというもので「隠れ遺伝子説」というものだった。
遺伝子の突然変異は周囲の環境要因には関わりなく起こるとされている。つまり進化というのは何の意志も持たず、ランダムに突然変異を起こすというものだ。ダーウィンのいう適者生存というのは、様々な目的のない突然変異から現状に即した変異を起こした個体が偶然、生き残っていくというものだ。その偶然の積み重ねが結果的に進化という

形を取っている。ところが１９８４年にフランスのＪ・Ａ・シャピーロが、ある条件下で大腸菌を培養したときに驚くべき変化が観察された。乳糖分解酵素を合成できないように遺伝子操作をした大腸菌を、乳糖しか含まない寒天の上で培養した。大腸菌は栄養を補給できず極限の飢餓状態に置かれ繁殖をストップしていた。ところが突如として乳糖分解酵素を作り出す突然変異体が現れ、菌のコロニーが爆発的に増殖し始めたという。つまり、必要とされる能力を意思の力で獲得したのである。これについて様々な説が考えられたが、生物の中にはいつ役にたつかわからない隠れ遺伝子が大量に眠っており、それらは何らかの引き金で活性化するという。真の論文はこの説に立ち、高等生物もその隠れ遺伝子を持っていると推論をし、植物中のヘモグロビンの遺伝子（ほとんどの場合植物には使用されない）の存在を実証して見せたのだった。

宮崎自然科学研究所の職員であり、妻でもある弘子は彼のために濃いめのモカを入れた。彼女も又、科学者である。長い黒髪と、どこかウサギを連想させる黒目がちのかわいらしい顔をしていた。真にとってはよき協力者であり最愛の理解者であった。

「瞑想による、多重人格の発生法はわかった。ただやはりうまくコントロールできない部分があるんだ。」
「セイレーンね。」
「そうだ。前にも、いろいろ出てきたぞ。ゴルゴン、キュクロプス、ヤクシャ、カバンダ、天狗、河童、やまたのおろち、阿修羅、ケンタウロス。まるで世界中の化け物の見本市みたいに、瞑想の中で必ず出てくるんだ」
「つまり、真が高潔と思っている人格を作り上げたときに、必ずおまけとして付いて来るみたいね。グリコのおまけみたいなものかしら」
「ふむ。瞑想の中で起こることだ。すべては僕自身の中にあるものだろうが、これも無意識の中にある一つの防御策だろうか。つまり、釈迦やキリストといった人格を作り上げる際に、僕自身にためらいがあるのかもしれない。もしかしたら恐れかもしれないな。神様と話すわけだからな。それが無意識の中の恐怖と結びついて、自動的に化け物を作り出してしまう。すべての原因は僕自身にあるのかもしれない。神に対する畏敬の念が本能的にある以上、グリコのおまけは必ず現れるだろう」
「ちょっと待って。真の論文の中に遺伝子の夢の話があったわね」
「遺伝子は眠っている。そして夢を見ている」
「そう、遺伝子の夢の話。遺伝子だってただの物質よ。その情報は普段は眠っているんだけど、その隠れ遺伝子の存在を示す何かの成分が遺伝子から定期的にごく微量出ている。そんな内容だったわね」
「そうだ。ドーキンズの利己的遺伝子の考えの基になっているものだ。極端にいえば遺伝子は意志を持っている。よりよき方向に行きたいと願っているのだ。これは批判が多いけどね」
「真の瞑想法は、阿字観から始まるのよね。それから広観、れん観へ移るのよね」
「そう、教科書通りにね。それからがオリジナルだ。当家秘伝の立川流のやり方を付け加える。つまり瞑想の中でセックスをするのだ。強烈なセックスから得られる極限の射精をイメージし、気をやったと同時に一気にワープするのだ。これは自分が一個の精子になり、子宮の中の卵巣を目指していくのだ。そして目的の卵に出会う。」
「そこが、カオスの海ね」
「そうだ。受精のイメージとともに、カオスの海の中へ放り出される感じかな」
「そこで、竜に出会う」
「竜というより、螺旋の化け物だな。これが僕のイメージする遺伝子なのだ。その中に大日如来が現れる」
「そこよ。そのイメージが現れる時の経過は覚えている?」
「そのあたりはまだ不鮮明なのだ」
「私の分析で説明すると、その時点で遺伝子の夢物質があなたの瞑想に影響を与えるのよ」
「あり得ないことではないが、僕は自覚していないのだ。化け物はお呼びじゃないからな」
「あなたは、瞑想というマインドコントロールで別人格と対話していると信じているけど、れっきとした科学変化があなたを支配しているのよ。つまり神の遺伝子に引き金を引くことを望まれているのよ」

「僕のやっていることは、隠れ遺伝子の引き金を引くことだ」
「そこよ。神と対話し、遺伝子まで導いてもらおうと考えているでしょう」
「今のところ、これしか方法がないと思っている。」
長い話に、弘子のコーヒーは冷めてしまっている。

真は、机の上のパソコンにスイッチを入れた。
今日のメールを受信していなかったのだ。
ブーンというモニターの音とカリカリとハードディスクが動いている音がする。

それを見ていた弘子はふと思いついたように、話し始めた。
「昨日、パソコンで仕事をしていたの。友人が送ってくれた、統計の簡単なソフトをインストールしたの」
「それがどうしたんだ。いつもやってることじゃないか」
真は、不思議そうに聞いた。
「まあ聞いて。インストールの後に再起動をしたのよ。いつものようにね。」

真は話を聞きながら、メールソフトを立ち上げた。
弘子は、パソコンを見つめながら、話を続けている。

「いつもどこかに引っかかっていたの。それが今、わかったわ。」

メールソフトは、何通かのメールを受信していた。

「再起動よ。つまり、リセット」
真は、弘子の顔をみつめた。
「リセット?」
「遺伝子の変化は、次の世代に現れるわね。つまり一度死なないと駄目なのよね」
真の目がすーっと細くなった。
「そうか、リセットか。つまり僕は一度死ななければならない」
「多分そうだと思う。神と対話しているのだから、すでに遺伝子の引き金にふれていたのよ」
「後はリセットをすればいいのか」
「そう、化け物はおまけじゃなかったのよ。神がしくんだリセットボタンだったのよ」
「僕は化け物に食われて死ねばいいのか」
「復活を遂げるのよ。キリストの伝説がそれを物語っているわ」
「死んでから神になる。そうだ、なぜこんな簡単なことにきづかなかったのだろう。確かに神話や、仏話には信仰を試すために、化け物を出す話がある。
僕は、やはり神を信じきっていなかったんだな・・・その傲慢さがあの化け物たちとなった。」
「そうよ。きっとそうだわ。」

「即身成仏の本当の意味は、リセットだったのか。しかし再起動しない場合もある」
真はキーボードでパソコンをリセットした。
派手な音とともにパソコンは立ち上がった。
「ほとんどの高僧は、瞑想の中で仏と会ったんだろう。そして現世で悟りを開くためリセットにすべてをかけた。成功したときに一番良い方法である断食を選んだのもそうだ。これが一番身体を痛めない」
弘子はいきなりパソコンの電源を切った。
「ほとんどの高僧がリセットできなかったのよ。エジプトのミイラ、即身成仏。成功したのはキリストだけだわ」

「いや、釈迦も成功例だ。彼の復活は予言されている」
「そうね。彼の場合、輪廻という進化の旅のことを理解していたのかもしれないわ」
真はモニターをにらみつける。
「僕はリセットできるのか。瞑想といっても、すべて意識の出来事だ。意識で死を感じれば、本当に意識は生き返らない。植物人間になってしまう可能性は大きい」
飲みかけのモカを一口すする。
弘子は真の顔を見つめている。
真は窓の外を見ている。
窓の外ではいつの間にか、雪が降り出していた。

稲川乱造

「報告しなさい」
柔らかだが、威厳のある声が会長室に響く。
東京セラン株式会社、いわゆる東セラグループの中枢といわれている東京本社の会長室だ。東セラグループは、昭和初期に現会長が一代で作り上げた、スーパー商社だ。
その会長とは、今ここにいる稲川乱造である。
もうすでに、90才を迎えようとしているのに、不思議なほど若々しい。顔こそ皺だらけだが、その声は不思議な若さを持っている。
「はい。カルフォルニア海洋生物研究所では、カンブリアシンドロームの箝口令がしかれました。さらにアメリカ各地にあった遺伝子研究所が、ほとんど閉鎖されました。アメリカ当局は、いよいよ進化に本腰になったようです」
一流のスーツを着こなした立木が直立不動のまま答えた。
「そういうことですね。わたしの研究所はどうですか。」
「はい。動物種は何点か捕獲するのに成功しています。人間種は特殊能力を持った人物に接触し有効と思われる能力を持つ者のみ、協力関係を保っています」稲川の質問は無駄がない。
「それは〝進化者〟か」
「残念ながら違います。突然変異者でしょう。しかしその能力は、有益だと思われます」
稲川は歩き回りながら、はっきりと話す。
「進化者の出現は予言されているのだ。もうすでにこの地球上にいるはずに違いないのだが」
稲川はあまり機嫌がよくないらしい。
「はい。ただ一つだけ判断に悩んでいることがあります」
立木の話しぶりは常に実直である。会長に対して絶対服従なのだ。
「ほう、それはどういうことかな」
「短命種族の存在が報告されました」
「短命種？ほう、おもしろい。どんな特徴があるのか」
「超能力のたぐいはいっさい報告されていません。ただ当たり前ですが老人がいないのです」
「死亡の原因は何だ」
「老衰です。50才を越えると静かに老衰が始まり死んでしまいます」
「ほう、進化ではなく退行現象か。面白い。しかし進化について何らかの手がかりがあるかもしれんな。厳重な調査を直ちに開始しろ。」
「はっ」
直立不動のまま答えていた立木は、軍隊式敬礼をするとクルリときびすを返し、そのまま会長室を出ていこうとした。

「待ちなさい、立木」
立木は時間が止まったようにピタリと立ち止まる。
「バイオセンターへ連絡して、胃の移植手術の用意をしとくように伝えてけ。前回のクローンの胃はすぐ胃もたれを起こす。」
「わかりました」
立木は呪縛がとけたように再び歩き出した。

立木は本社を出ると、黒塗りのベンツで運転手に「徐福研究所」へ行くように指示を出した。移動中、携帯電話でひっきりなしに指示を出している。
立木は稲川乱造の特別秘書という肩書きである。だが、彼の素性はヤワなものではない。ヨーロッパで傭兵経験を持つ筋金入りの軍人だった。

短命種

立木は研究所につくと所長室へ直行した。
さえない風采の所長は、背中を丸め机に向かっていた。
立木は所長と目が合うと間髪を入れずに用件を切り出す。
「所長。御大は短命種が気になっているようだ。その後の追加調査と進化種への可能性を報告しろ」
「ああ、短命種ですか。あれは関係ないですね。」
所長は、渋い茶を飲みながら無造作に答える。
「私は報告しろといっている」
立木の顔は無表情だが、その声はすこぶるコワい。
「は、はい」
一瞬にしてはげ頭の所長は萎んでしまう。
所長はあわててパソコンのモニターをみながら説明を始めた。
「短命種の報告は3年前の秋、えーと、10月30日に九州担当の調査班からありました。えー、場所は宮崎県上人郡上人村ですね。大腸菌O-157騒ぎの時、強制診療の際のデータです。上人村総人口84名。平均死亡年齢が50才。死因は全て老衰です。現在の最年長者は、立川　守47才ですね。この村は宗教関係者が多く、かなり過酷な修行を若い時からしているというので、その影響かと思われます」
「宗教関係者とはなんだ」
「エー、なんでも真言宗の流れをくむ流派と称しているのですが、調査の結果、立川流という名前とわかった、とあります」
「何、立川流だと。あの邪教がまだ生き残っていたのか。その他にわかっていることは何だ」
立木は折り紙付きの右翼である。国家に反抗的な団体は全て記憶している。
「短命種との呼び名は、新自殺遺伝子が彼ら達から多量に検出されたからです。まあ自殺遺伝子は細胞の自殺機構アポトーシスとよばれ、ガンなどはこの機構が働かないため、異常繁殖するのですが、彼らのは40才ぐらいからこの細胞の自殺システムが一斉に働き老衰死を引き起こします。すなわち自然死が50歳前後にセットされているのです。まあ、何らかの突然変異でしょうが、アポトーシス自体がわからないことが多く、未知の分野です。我々が探しているのは、優性遺伝の進化種です。短命の遺伝子など劣性でしょう」
「所長。短命だから劣性とは限らないぞ。それと立川流も気になる。再調査をしろ」
「はあ、調査員の都合もありますが、来月には報告書を作成できると思います」
「俺の命令は最優先だ。特殊部隊を使え」
一段と声がコワくなる。職業柄、恫喝は得意なのだ。

「特殊部隊がまだ使えるかどうか、はっきりしていませんですがいいのですか？」
「かまわん。短命種が調べるのにいいチャンスだ」
立木は冷たく言い放つと、さっさと所長室から出ていった。
所長は恐怖の呪縛から解放され、汗びっしょりになっている。
いそいで、インターフォンのスイッチを入れる。
「山田、山田はいるか。特殊部隊に連絡をしろ。出動だと」
と、がなり立てた。
インターフォンからは、あわてた声で返事が聞こえる。
「立木という奴は何を考えているのかわからん」
所長は、冷や汗でくもった眼鏡をふいた。暴力的な事を非常に恐れを感じる小市民なのだ。だから恫喝的な立木は大の苦手なのだ。

稲川乱造は徐福会の会長でもある。
徐福とは、あの不老不死の薬を探しに出た中国の伝説の人物だ。だが乱造は、科学の好きな男だった。けっして怪しげな宗教まがいのことは、信じなかった。彼が信じるのは科学のみだ。彼の秘密の研究所はバイオテクノロジーを専門に研究しており、クローン人間など10年前に成功している。もうすでに、90才を迎えようとしているのに不思議な若さを保っているのは、自分のクローンからの臓器移植をおこなっているからだった。乱造の財力とネットワークを考えれば、どうってことのない事だ。しかし、それだけでは満足していない。
「人間は欠陥が多すぎる」
これが稲川乱造の口癖である。彼は遺伝子に目を付けた。いわいるバイオテクノロジーである。
彼の「人間は進化しなければいけない」という信念は異常で神がかっていた。そして彼の研究所でのクローン人間の成功は、さらに信念を強固にした。
アメリカの研究所で カンブリアシンドローム が発見された。つまり、遺伝子の進化が現実に始まっている可能性があった。大昔の種が蘇ってきたのは、その予兆である。そうすると、人間種にも新しい種の出現がすでにあるかもしれないのだ。
稲川乱造は秘密組織「徐福会」を作り遺伝子狩りを始めたのだ。しかし、その成果はうまく上がっていなかった。金にあかして探させたのだが、偽超能力者と呼ばれる人間しか集まらなかったのだ。しかし中には、実用に値する特殊能力を持っている人間もいた。乱造は、自称超能力者達を徹底的に調べさせた。だが遺伝子的に見れば普通の人間だった。念動力、精神感応、予知、いずれも人間に起きる微弱な電気の作用で起こる現象と推測され、進化と考えにくいものだったのだ。たしかに不可解な能力もあり、研究の余地があったが、乱造にはピンとこなかったのだ。
「彼らは、前座じゃ。本物のミュータントは必ずいるぞ。」
彼の号令は、最近一段と強まってきた。立木でさえ、震え上がる妄執であった。

誘拐

宮崎県上人郡上人村 に3名の男女がいた。立木の部下の荒木、それと島田紀子、沢田敦。2人は特殊部隊と呼ばれている。島田紀子はテレパスとよばれる精神感応が出来、沢田敦は念力と呼ばれる能力を持っていた。いずれも、研究所で集められた人間だったが、その能力が買われ高額で部隊に入ったのだ。ただ、部隊といっても実戦の経験はなく、その力は未知数だった。
荒木は立木の傭兵時代からの子飼いの部下で、特殊部隊の指揮を任されていた。超能力者といっても、只の民間人である。作戦行動の時は指揮官が絶対必要なのだ。だが荒木は超能力者達をまったく信用していなかった。僅かな能力を過大評価するペテン師だと思っている。

今回の作戦で、初めて実戦に挑むのだ。10人ほどいる中で、いちばん使えそうな奴を選んだのだが、２人ともとうてい軍隊にむいてるとは思えなかった。
「今回の作戦は人身誘拐である。適当と思える人間のあたりを付けたら、すばやく行動を起こす。地元警察には根回しがすんでいるので、躊躇なくやれ。」荒木は命令を伝達する。
「隊長さんよう。どんな奴を捕まえればいいんだ」
沢田がねちっこく聞く。もとチンピラやくざの言い回しが鼻につく。
「なるべく死にかけている奴がいいと、指示を受けている」
冷酷な口調で荒木は答える。
「あたいは何をすればいいの」
島田紀子の間の抜けた声が頼りない。
「いいか、２人とも夫婦者の旅行者を装ってまず、探りを入れるのだ。目星がついたら俺に連絡しろ。決定は俺が下す」
ますます冷酷な口調になった。
「わかったよ。おい紀子、行くぞ」
「あいよ」
２人は、渋々里に下りていった
「頼りない奴らだ」
吐き捨てるようにつぶやいた。

上人村は30軒ぐらいの古い家が、点在していた。病院も派出所もなく、車一台通れるほどの砂利道一本が外界に通じるものだった。
２人は、村の真ん中にある、お寺らしき建物へ歩いていった。
門には真言宗昇天教という看板が掛かってある。門をくぐると広い境内があった。庭箒を持って作務衣を着た男が、めざとく侵入者を見つけた。
「こんにちは」
沢田が笑顔で訪ねる。
「道に迷ったみたいなんです。ここはどこですか」
地図を片手に如才なく演技をする。作務衣の男が用心深そうな目で見つめている。
「それと、どっかに泊まれる所はありますか」と猫なで声で紀子も調子を合わせる。
「いや、この村にはそんな施設がありません」
と素っ気なく答える。
「あーそうですか。困ったなー」
「来た道をまっすぐ戻れば1時間で町に出ますよ」とあくまでも素っ気ない。
「そうしようよ、アツシ。」
２人は、素早く引き下がった。

作務衣の男は、２人が見えなくなるまで立ち止まっていた。
「紀子、これじゃ、しょうがないなー。とりつくしまがないぞ。」
「そうねー。一瞬だけどあの坊主にスキャンをかけてみたの。そしたら、青い点滅がたくさん感じたの。だいぶ警戒されてるわね」
「青い点滅？それだけかよ。お前はテレパスだろう。もっとよくわからないのか」
「テレパスだっていろんな種類があるのよ。私の場合、色で感情を理解するの」
紀子は自尊心を傷つけられているのだ。不機嫌になった。
「何だ、その程度なのか。警戒されているくらい俺でもわかったよ」
粗雑さはチンピラの特性だ。
「それじゃ、夜になったらこの寺に忍び込むとするか。情報じゃ爺がこの寺に住んでいるということだからな。あ

のこわい荒木旦那に連絡しとけよ」
沢田は当然のように主導権を握った。
「わかったわよ」
ふくれっ面の紀子は、トランシーバーのスイッチを入れた。

上人村は日が暮れると真っ暗になった。
ざわざわと風が木立を通り抜け、葉を揺らす音が不規則に聞こえてくる。
人里だというのに闇はとても深い。
その暗闇の中に、黒装束の３人の人間が姿を現した。
「いくぞ」
小声で号令をかける。
荒木は先頭に立って、昇天教の境内へ入っていった。本堂には確かに人の気配がある。しかしどの扉もがっちりとした鍵がかかっていた。
荒木は、窓ガラスを見つけ、すばやく行動を起こす。ガラス窓にテープを貼り、ガラス切りで巧みに穴をつくり、鍵を開けた。荒木にしてみれば、これくらい児戯に等しい。やすやすと３人は境内の侵入に成功した。

真っ暗な本堂の中で荒木は赤外線暗視スコープを付けた。
壁沿いをゆっくり進んでいく。
「誰だ」
いきなり低い声が聞こえた。だが、どこから声が出ているのか方向がわからない。荒木は、ナイフを抜いた。
「泥棒か、警察に通報するぞ。」
再び聞こえる。荒木は暗視スコープで見渡すが、大きな柱がたくさんあり、声の主を捜せない。紀子は目を閉じ集中し始める。
「左よ。いちばん左の柱の陰にいるわ」
紀子はテレパシーで人影を察知したのだ。
声の主は突然動いた。しかし、その体からは青し白い光を放っている。
「あの光よ」
荒木はいきなり走り出した。

暗闇での攻撃は得意なのだ。
青い光を放っている男へ、走りながらナイフを投げる。
男はかわし損ね、足に命中したようだ。
荒木は素早くもう一本のナイフを手にしている。
そのまま男にぶつかっていく。
「ぐっ」
短いうめきが漏れた。ナイフは見事に心臓を貫いている。
一人始末した。

次の瞬間、荒木の背中へナイフらしきものが飛んできた。
さすがの荒木も、かわしきれずもんどりをうつ。
床を回転しながら、柱の陰へ逃げ込んだ。
声一つ立てないが、荒木の顔は苦痛にゆがんでいた。
左手の上腕に見事に見慣れぬ武器が突き刺さっていたのだ。
荒木はそいつを引き抜いた。
両側に鋭い錐のようなナイフがついており、中央を握るようになっている。

密教の法具だが、こいつは実用だ。
荒木は長袖の合金防弾シャツを身につけている。
独鈷杵は、そのシャツを突き通っていた。
恐るべきスピードと威力だ。
ご丁寧なことに、その上に薬品が塗りつけられているらしい。
そのせいで荒木は一時的に身動きが出来なくなってしまった。

沢田と紀子は真っ暗な本堂の隅でじっとしていたが、沢田が肘で紀子をこづく。紀子は頷き、再び思念をこらした。
紀子のテレパスは静電気だ。人間の発する微弱な電波を増幅して感じることが出来るのだ。
さっきの仕業も、紀子の力だった。
紀子は相手の静電気を増幅して、青白く光らせたのだった。
今回も、同じ事を試している。
沢田はゆっくりと動く。
男が動く気配がする。
急に自分の体が光り始めたので驚いたのだろう。
次の瞬間、いきなり羽交い締めにされた。
「お前達は誰だ」
腹に響く声が耳元でささやく。
沢田は精神を集中する。
「ぐわっ」
突然、羽交い締めにした男が目をむいて崩れるように倒れた。
「ふう・・」
思わず息が漏れた。
そのまま、沈黙が流れた。
荒木が静かに駆け戻ってきた。
「警備は2人だったようだな。」
やっと痺れがとまったみたいだ。
「何をしたんだ、沢田」
「これが俺の超能力さ。奴の脳味噌の神経を引きちぎってやったんだ」
「凄いわね」
「俺の念力は1メートル以内じゃないと、きかないんだ。頼むぜ、荒木の旦那。こういうのには慣れてないんだ。」
沢田の顔は汗びっしょりで、青ざめている。

「只の寺じゃないな。これを見ろ。独鈷杵だ。こんなものを武器に使う奴らなんてあったことがない」
「同感、同感。早いとこ用事をすまそうぜ」
沢田は、臆病風に吹かれて始めている。

荒木は、２人を引き連れて本堂の奥へ進んだ。
長い廊下を渡りきったところに、鍵のかかったドアがあった。
荒木はその鍵も特殊錠で造作なく開ける。
静かに中へはいる。

広い部屋だった。奥の方にロウソクの炎が２つ見える。
祭壇があり護摩壇もある。
その前に一人の男が蒲団に入っている。

眠っているのだ。
紀子は思念をこらした。
「大丈夫よ。何か薬物で眠っているわ」
「よし」
荒木は祭壇の前まで注意深く進む。
ロウソクの揺らめきに祭壇の中の仏像が照らし出されている。
「何だこりゃ」
沢田が素っ頓狂な声を出した。
その像は2人が抱き合っている淫靡で奇怪なものだった。しかもおまけに頭部が象なのだ。
「気味が悪いわ。早くして」
荒木は、その眠っている男を軽々と担ぎ上げた。
そして3人はその場からいなくなった。

天地寺の宮崎自然科学研究所の電話が鳴った。
立川真は、パソコンから目を離して手元のコードレスホンを取った。
電話を聞く真の顔が曇る。
「それで、親父はどうした。・・・いなくなったのか。よし、すぐ行く」
真は電話を置くと怒鳴った。
「弘子、出かけるぞ」
奥の部屋から弘子が顔を出す。
「どこへ行くの」
「上人村だ。親父が誘拐されたそうだ。」
「そんな・・・」
「お前も来るか」
「すぐ用意するわ」

2人は支度をすませ、車に乗り込んだ。
弘子がドアを閉めたとたんパジェロは急発進する。
「なぜ、法師様が?」
「事情がまったくわからない。親父は涅槃の時が近まっている。夜は紫紺湯で眠り込んでいるはずだ。それよりも、運慶と知念が賊に殺されていたということだ。あの2人を殺せる奴など知らないぞ。とりあえず、一族のみんなと相談しなければ」
すべての不安が走馬燈のように前頭葉を駆けめぐる。
キチガイみたいな速度でパジェロは夜の道を突っ走っていった。

隠れ遺伝子

荒木と沢田、そして紀子は、東京にある隠れ家の立木の部屋にいた。
立木は通信機とパソコンのびっしり並んだ部屋で3人を待っていたのだ。
「ご苦労、収穫はあったか」
荒木は事の詳細を報告する。
「はい、男を1名拉致しまして、研究所で収容しています」
荒木は直立不動で答える。

「細かいことは車で聞こう。お前達は帰っていい」
「ありがたい」
沢田と紀子は一刻も立木の前にはいたくないらしい。2人とも逃げるように部屋を出ていった。
「どうだ、あの連中は使えるか」
「はい、状況により戦力として使えるかと思います」
「そうか。よし研究所へ行くぞ」
立木は、荒木を連れて執務室から出ていく。
「お前の話を総合すると、どうもただ者ではないな。お前が見た仏像は歓喜天の双身像といって立川流の象徴だ」
「密教ですか」
「そうだ。一般的にはセックス宗教といって、江戸時代には絶えているのだが、形を変えて生き延びているのだろう。当て推量は、本質を見誤る元となる。所長の調査を待とう」
あくまでも、立木は理論派なのだ。

研究所からの報告で、会長の稲川乱造は研究室に来ていた。
「所長、あの報告は確かか」
「はい」
まるで借りてきた猫だ。よほど怖いのだろう。
「あの男の細胞と遺伝子を出来る限りくわしく調べました結果、遺伝子に明らかに今まで発見されていないパターンが多数発見されました。更に細胞内に多数のミトコンドリアの痕跡が見つかったのです」
「具体的にはどういうことだ」
「遺伝子の進化論の中に隠れ遺伝子論というのがあります。つまり普段使わなくても、非常時には活躍すると考えられています。現在全ての遺伝子が解読されたわけではないので新型のパターンと判読するのは難しいのですが、鳥や、魚など人間以外で解読されている遺伝子がかなりの量で混在しているのです。」
「もっと具体的に話せ。」と、稲川は所長を怒鳴りつけた。
乱造は機嫌が悪かった。再度移植した胃が、やはり調子が悪いのだ。
所長は硬直したようになり目を白黒させた。所長は極度に緊張すると言語障害に陥ってしまう。うーうー言うばかりで、言葉がなかなか出てこなかった。
「私が代わりに話しましょう。」
所長の後ろに控えていた鋭い目の白衣の男が話し始めた。
赤城龍彦である。東大で大秀才と折り紙を付けられた副所長である。
30才と若いがその理論はまさに剃刀の切れ味がある。
「この男は、新しいタイプの遺伝子を持っています」
「うむ、龍彦君か。話を続けてくれ」
稲川は、この孫みたいな年齢の男に好意を持っている。好意と言うより、才能がある男しか興味ないのだ。
「この遺伝子は今までの概念をうち破った存在です。つまり鳥人間や、魚人間といった人類が生まれる可能性があるのです」
「うむ、つまり進化種か」
「はい。しかし最近起こった突然変異ではないですね。たぶん大昔から、人間と共存していたと考えたほうが自然でしょう。ただこの遺伝子は不活性なのです。つまり今は役に立たないのです。しかし矛盾があります。彼らには可能性が多すぎるのです。一つの生物がこれだけの可能性を持つことはあり得ません。もしこの男の遺伝子が全て活性化したら、生物の王になるでしょう。
さらに普通心臓の筋肉にみられる多数のミトコンドリア、これは活力の源ですが、普通の細胞に存在していた痕跡があります。理論的にはこの不思議な遺伝子が活性した時に使われるとも考えられます」
「つまり、この男は化け物の可能性だけを持つのだな」
「その通りです。更に不思議な事はその寿命の短さです。なぜ自殺遺伝子が50才前後でいっせいに働いて老衰しな

ければいけないのか、その必然性がわかりません。」
赤城の話は、まさに立て板に水であり淀みがなかった。
乱造は考え込んでいた。
乱造の考えている進化とは、能力の増大であり、寿命の長さであった。超能力者達を調べるのも、現在の人間種にプラスアルファーを求めていたからだ。
しかしこの男は、鳥や、魚、獣の遺伝子を持つという。これではまさに化け物である。その上寿命が短い。この男の正体を、どうとらえていいのかわからないのだ。
「赤城君、この男と話が出来るかね」
「通常の方法では無理でしょう。衰弱がかなり進んでいますので。ただアストロミンを使えば真実を語ってくれるでしょう」
今まで赤城の後ろでうつむいていた所長は驚いた。若造がとんでもないことをいうからだ。所長の小市民さはある意味では健全な精神から来ているのだろう。人に危害を加えることなどとんでもないことなのだ。
「アストロミンは危険だ。麻薬と自白剤をミックスしたものだ。この男に打てば、30分後には確実に死んでしまう」
「所長。この男は、ほっといても死んでしまいます。30分話が聞ければいいじゃないですか」
冷酷な口調で赤城は言い放った。
「赤城君のいうとおりだ。さっさと用意したまえ」
稲川乱造の一声で、まわりがいっせいに動き出した。
所長はさらに青くなっている。完全に赤城と立場が入れ替わっている。
所長はもう一言も話し出せなくなった。

進化種

治療室では、法師、立川守がアストロミンを打たれて横たわっている。
まだ50才にもなっていないのに、80才とも90才にも見える。急速に老化が進んでいるのがよくわかった。赤城がベッドの横に立っている。
所長は頭が痛いといって退席してしまった。
乱造も、赤城もそんなことは気にもしていなかった。
「もうそろそろいい頃だろう」
赤城は立川守に話しかけた。
「立川さん、話せますか」
立川守の顔は薬のせいで赤みがさしている。
赤城の声に必死で答えようと口が開いている。
「き、こ、え、る」
とぎれとぎれだが話し始めた。
「あなたは誰ですか」
「私は法師である」
次第に声がなめらかになってきた。薬がきいてきた成果だ。
「法師とは何ですか」
「立川流の種を守るものだ」
「立川流とは何ですか」
「密教真言立川流はダキニ天法の秘法を受け継ぐ大和の国の守護法である」
「立川流はセックス邪教と呼ばれ江戸時代に途絶えたはずですが」
「そんな、禍々しいものでない。性の力を敬う仏の理りである」

赤城は話の筋道を変えた。
「あなた方は人間ですか」
「我々は選ばれた民である」
ほう、と乱造は聞き耳を立てる。
「あなた方は、妖怪ですか」
「我々は仏の種を持つ者である」
「仏の種とは何ですか」
「一子相伝の秘密である。我々の一族から、神が生まれ、仏が生まれる」
「それはどうしてですか」
「それが我々の宿命である」
話が堂々巡りになりそうなので、又話題を変える。
赤城はなかなかの聞き上手である。

「あなたは仏になれるのですか」
「私は成れなかった。力と法が足りないのだ」
「あなたの一族で仏になった人はいますか」
「全ての仏と神は我々の出である」
大胆な答えに、赤城はとまどった。
「お釈迦様も、天照大神もそうですか」
「そうだ」
「そんな一族がなぜ立川流を?」
「立川流は、男女のまぐわいの力を利用できるただ一つの法である。まぐわいの力こそ、飛翔の源である。この力しか仏への道はない」
「飛翔とは何ですか」
「飛翔は転生である。進化である」
「進化とは何ですか」
「進化とは、仏のことである」
核心に触れて乱造はふるえている。興奮しているのだ。
「人は仏になれるのですか」
「人は仏になれない。これは理である」
「なるほど、おもしろいですね」
赤城は額の汗を拭った。乱造もつられて汗を拭う。
「もう少し聞いてみましょう」
「あなた方は寿命が短いですね」
「それが宿命である」
「仏になれる種を持つ一族なのになぜ早く死ぬのですか」
「早いとは思わない。自然のことだ。種の受け渡しがすめば我々は役目を終えるのだ」答える立川は、声が震え始めた。
薬の副作用で死が近づいているのだ。

「よし、わしが尋ねる」
稲川乱造はベッドのそばへ行った。
「お前の一族はどこにいる」
「世界中に・・・散らばっている」
「仏になれる奴がいるのか」
「真が・・・真が仏の道を・・・」

「真とは誰だ」
「真が・・飛翔・・できる・・・」
がくりと顔が倒れた。
そしてそれっきり口を閉ざしてしまった。

「おもしろいですね。会長」
「真という男をまず探し出すことだな。赤城君、この男を徹底的に調べるのだ。大事な標本だ」
「それでは所長と相談として」
わざとらしい謙虚さが嫌みな言い方だった。
「所長？　あいつはもういい。役にたたん。赤城君がここの責任者だ」
「ありがとうございます」
赤城の目が素早く光った。

一族

「立木さん、話は聞いたとおりだ。真という奴を捕まえて来て欲しい。仏を捕まえるのだ。大切にですよ」
「わかりました。直ちに部下を」
稲川乱造の興奮は冷めていない。
「いや、お前がいけ。失敗は許されんぞ。」
「わかりました」
「立木さんなら、会長の為に必ず進化の遺伝子を発見してくれますよ」
赤城はお世辞も抜け目ない。
「頼むぞ赤城君。君なら出来るだろう。わしは仏になれるかもしれんのう」
乱造の顔がほころび始める。
立木はじろりと若い赤城を見据える。
赤城はそれに気づくとクルリと背を向けた。
立木も足早に研究所を出た。

立木は荒木達精鋭部隊を集合させた。
会長の命令で、立木が自ら指揮を執ることとなったが、立木が実働部隊として指揮を執るのは今では非常に珍しい事だった。つまり非常事態ということがはっきりわかったのだ。それゆえ部隊には緊張がはしっている。
黒づくめの部隊は全員で7人だ。
荒木を行動隊長として超能力者を2人、行動隊員が3名の編成だ。
念力の沢田だとテレパスの紀子も参加されられた。前回の成果が評価されたからだ。
立木の命令伝達が行われた。
「いいか、標的は立川真、一人だ。後は必要ない。妨害されたら容赦せずに殺せ」
荒木は返事をすると同時に素早く武器を点検する。
「わかりました」
準備完了の返事だった。
「よし、いくぞ」
立木は、虎の身のこなしで上人村の秘密寺へ侵入開始した。

立川真は、事件の一部始終を聞いたが、誰が父を誘拐したのか見当がつかなかった。警備役の運慶と知念は死亡し

ている。特に知念の死因は外傷がなく、脳障害の痕跡があるがショック死のようで、ますます謎は深まっていた。2人とも武術に関しては達人である。一般人がこの2人を殺せるはずなどあり得ないのだ。とりあえず事件の日から真も弘子も、この寺にとどまる事にした。

「弘子。みんなとも相談したのだが、親父がいなくなった理由はわからんが、ここは一族の掟に従い、隠れようと思う」
「そうね、只の事件ならいいけれど一族の事をかぎ回っているとしたら、大問題だわ。明日にでも、他の兄弟に連絡を取るわ。法師のことは、身を隠した後で調べればいいからね」
「とりあえず、秘宝は地下の金庫室にしまい、五人衆で警備をすることにした。まさかと思うが念の為だ」
「真の飛翔が近間っているのよ。真も奥の間にいた方がいいわ」
「そうしようと思う」

真と弘子は本堂に入った。本堂には一族が集まっている。
一同は真を待っていたのだ。
「皆の者、このたびの事件は原因が不明である。しかし、我が一族の掟どおり、隠れることに決定した。隠れは一日後に行う。それまでに各自準備を済ませておくようにしてくれ」
一族84名は黙ったまま頷く。
「また念のため、警備を厳重にすることとした。皆の者も気を付けといてくれ。それと、こんな時にいうのもあれだが、私は飛翔の入り口に立った」
おう・・と言うざわめきが広がった。
「完全ではないが、目安は付いた。失敗すると死ぬかもしれないが、一族の悲願を叶えられるかもしれない。以上だ」
一族は、不安と期待に入り交じった興奮が伝染していく。
無言のまま解散した。

風が吹いている。冷たい風だった。
月も出ている。満月である。
隠密攻撃には満月は不適当である。
冷たい月の光がこの山奥の村に降りそそいでいる。
80名以上も住んでいるというのに、この村は静まり返っている。
不自然な静けさだ。おまけに30軒近くの家々の明かりは消えている。
まだ夜の8時なのだ。普通なら一軒ぐらい電気がついていてもおかしくない。明らかに警戒されている。全ての家々は粗末な作りだが、不思議な統一感がある。明らかに計画的に作られている村だ。
立木達は、寺の手前の雑木林に潜んでいた。

黒づくめの衣装は全て防弾加工がしている。
暗視眼鏡、サイレンサー付きの銃、ナイフ、帽子に仕込んだ通信機器。完全武装である。立木と二人の超能力者は、後発部隊として残ることになった。
超能力者と言っても、軍人ではない。まして今回は精鋭部隊での行動だ。沢田と紀子は足手まといになる可能性がある。状況次第では出て行くが、それまではここで待機させておく事にした。
荒木と攻撃隊員3名は、素早く寺の門まで駆け込んだ。門から本堂まで20メートルほどある。二手に分かれ左右から進んでいく事にした。右手の隊員がガラス窓を発見し、ガラス切りで小さな穴をあける。その穴へライター用のガスボンベみたいな物のスイッチを入れて投げ込んだ。昏睡ガスである。同じように荒木もボンベを本堂に投げ込んだ。
隊員は防御マスクをいっせいに付ける。この本堂の大きさなら30秒あればガスは充満する。タイミングを見計らい、左右から同時にガラス窓を割って侵入した。中に転がり込んだ4名は、柱の陰に身を潜めしばらく様子を見る。
荒木の合図とともに、奥へ進んでいく。
その時、各隊員に同時に独鈷杵が降ってきた。

ひゅっ
独鈷杵には法具としての飾りが付いている。それが風を切る音を出す。
4名は、間一髪で転がり避ける。避けたところへ無音の独鈷杵が時間差で飛んできた。最初の攻撃はおとりであった。単純な攻撃だが恐ろしい攻撃だ。
右手の隊員2名の肩と太股に錐状の独鈷杵が突き刺さっている。
荒木達は、間一髪避けた。
体勢を立て直すと同時にめくらめっぽうサイレンサーをぶっ放した。
「表へ出ろ」
荒木は、叫びながら侵入した窓から外へ飛び出した。
地面を転がりながら木陰へ飛び込んだ。
インカムのスイッチを入れる。
「2名、負傷。1名不明」

逃げ遅れた隊員は、じっとしている。右手の2名はとどめを刺されているようだ。サイレンサーを右手に構えガラス窓へにじり寄った。
ひゅっ
先ほどと同じ独鈷杵が飛んできた。飛んできた方向へサイレンサーを撃つ。
撃ちながらさらに前へ飛び込んでいった。
転がりながら暗視眼鏡で人影を一瞬確認し、その方向へサイレンサーを再び撃ち込む。見事な反撃だった。人影は音を立てて倒れ込んだ。

銃を構えた腕へ鋭い回し蹴りが飛んでくる。
隊員は銃をはじき飛ばされた。
連続技で肘が顔をねらってくる。
のけぞりながら金的を蹴り上げる。
決まったと思った瞬間、背後から首筋に独鈷杵がズンと差し込まれた。
二人がかりの攻撃だったのだ。
隊員はがっくりと沈む。沈むと同時に大爆音とともに自爆した。
予想もつかない一瞬の出来事だった。
白煙が消え去ると、3名の肉片がまわりの柱にこびりついていた。
外に逃れていた荒木は、爆発音を聞くとすぐ連絡をいれる。
「立木隊長、不明1名が自爆しました」
「よし、その場で待て」
立木達は行動を開始した。

荒木は3名に囲まれているのを感じている。じわりとその輪は縮まっている。荒木は銃を構える。左手には手榴弾を握っている。
ピンを抜いてその場に置き、右へ飛び出した。
ひゅっという音が追いかけてくる。きっと次には無音剣がセットで飛んでくるはずだ。単純な攻撃だが、その効果は大きい。無音剣がどこをねらっているのかは賭である。おもいっきり右の木陰へ飛び込む。さっきおいた手榴弾が爆発をした。
ぐっ
というううめき声がする。荒木のは只の手榴弾ではない。中に何万本かの針が仕込まれている。汚い恐怖の仕掛けだ。
これで一人やっつけたはずだ。
息つくまもなく、木陰から飛び出して荒木は走り出す。

予想通り二つの影が両側についてくる。
いきなり立ち止まるフェイントでサイレンサーを右手の影へ打ち込む。
プスプスという連続音が響く。
すると左の影が飛び込んできた。
月の光で刃物が光る。日本刀だ。
むき身の日本刀を腰だめにして突っ込んで来る。

こいつらは恐ろしい。荒木は初めて本当の恐怖を感じた。彼奴らはいつも捨て身である。狼のような素早さで、捨て身でかかってくる奴ほど怖いものはない。まるで死神が、飛びかかってくる恐怖を覚えた。
死神の影を銃で撃っても俺は串刺しになるだろう。さらに右の影もすぐそこだ。荒木は死を予感した。
その時、
ダダドドド・・・・
という銃声が目の前の敵を吹き飛ばしていた。
至近距離からの機関銃の発射である。
目の前まで来ていた死神はぼろぼろになって吹き飛んでしまった。
右の影は一瞬動きがとまった。
今度は「ドン」という音がしてその影も吹っ飛んだ。マグナムだ。
「荒木行くぞ」
立木の声がした。荒木は我に返った。
「躊躇するな、銃を使え。相手はただ者じゃない」
立木と荒木は、本堂の奥に踏み込んだ。
立木は躊躇がない。機関銃をぶっ放しながら踏み込んでいく。
荒木も、マグナムを2丁手にしている。今度は見境もなくぶっ放していく。
派手な総攻撃だ。ただ影はもういないようだ。
前回と同じように、奥の間へ進んだ。

立木がドアをマシンガンでぶち抜く。
ぼろぼろになったドアに荒木が飛び込む。回転をしながら、マグナムをぶっ放す。
一瞬の突撃で、2名影が死んでいた。
立木は2つの死体にマシンガンの玉をたっぷりぶち込んだ。
容赦も躊躇も立木にはない。まして、力比べなどという考えが全くない。
戦いでは「躊躇」した方が死ぬのだ。荒木は、傭兵時代、立木が味方からおそれられているのを知っている。味方であろうと、子供であろうと敵の可能性がある奴はまず、ぶっ放すからだ。
立木と行動するときは、要注意だ。味方といえども不穏な動きをすると躊躇なく、マシンガンが火を噴く、そんな男だった。
奥の祭壇には歓喜天が祭ってある。
「前回はここにあの男が眠っていました」
「ふむ、この奥を探して見ろ」

飛翔

この奥の秘密の部屋に立川真はいた。
この部屋は薄暗く、壁には曼陀羅が貼ってある。

普通の曼陀羅ではない。立川流敷曼陀羅だ。男女が両足を広げ結合している。まわりには髑髏が飾ってある。
正真正銘の立川流だ。
真は横たわっている。素っ裸である。
その股間の上に、弘子はまたがっている。
真は不乱に真言を唱えている。
「オン・キリク・ギャグ・ウン・ソワカ」
「オン・キリク・ギャグ・ウン・ソワカ」
下着だけ脱いだ弘子は目を閉じ、盛んに腰を動かしている。

立川流というのはセックス教ではない。
古来より、宗教の中でセックスはその力を認められている。
その力の使い方は2通りだ。一つは徹底して押さえ込む。一般の宗教は、禁欲がベースになっている。立川流はその逆で昇華させる。
西洋の性魔術や、インド、チベットの「タントラ」、中国の「道教」にも、そのエッセンスは脈々と流れている。ただ、その特殊性や、実践法が道徳を逸している場合が多く、秘法として一般に漏れることは少ない。しかし、日本では突如として表社会に登場してオカルトとして世間を騒がせたことがあった。それが真言立川流である。セックスによって得られる力は「シャクティ」と呼ばれ、生命の力のことをいい、「とぐろを巻く蛇」とか「眠る蛇」と呼ばれている。立川流の神髄は、この「眠る蛇」を覚醒させ、脊髄に沿って走る霊的器官を上昇させて頭部にある「男性原理」と合流させることにある。密教ではこの男性原理に金剛界の大日如来を、シャクティの蛇に胎蔵界の大日如来を当てはめている。

立川真は、このシャクティ、眠る蛇を遺伝子だと考えた。
瞑想により、シャクティを捕まえた。そして合流させることには成功した。
問題はそれからである。最後の難関のリセットが出来なかったのだ。
リセットできなければ、眠れる蛇は目を覚まさない。
そして今、真は見知らぬ敵の攻撃を受けている。
隠れるのが遅かったようだ。
敵は、我々の想像を超えて敏捷だった。
立川流というのは、異端教として一度壊滅寸前になった。世間に知られることは、滅亡を意味するのだ。法師を誘拐されたことに動揺して、打つ手が後手に回ってしまった。これは明らかに、真のミスだった。

攻撃を受けた時点から、弘子と瞑想に入った。
守っているのは6人の密僧だ。
一度目の襲撃で二人やられている。
これ以上の手練れはこの村にはいなかった。
すなわち、ここまで侵入されたら、真では太刀打ちできない。
それ故、最後のチャンスとして飛翔を試みた。

腰の上に乗る弘子のあえぎはだんだん大きくなる。
快楽の嵐が始まっていく。
真は弘子の性感帯を知り尽くしている。
腰、胸、肛門、首、ありとあらゆる所を刺激していく。
弘子は何度も、小さなあえぎを漏らす。だんだん腰の動きが円をえがきだす。台風と同じなのだ。大きい快楽は渦を巻き、竜巻と化す。
快楽の力が大きいほど、真は瞑想の世界へ入っていけるのである。

台風のような快楽は外円である。外円の力が強ければ中の真空地帯は固定される。弘子は「無」に入った。頭の中は真っ白となり、次第に形を整えていく。しばらくすると蛇のような形になった。
竜である。弘子の頭の中の竜は、一気に下腹部へ走り始めた。
その瞬間、弘子の膣はうねり始めた。真の陰茎を不思議な蠕動でしごき始めている。
快楽は真に移る。
真の陰茎は蛇のようにしごかれ続けられている。
それは弘子の膣の動きでもある。
真は、上りつめる快楽を利用してワープしようとしているのだ。
何度かのうねりをとらえ、大きな波を待つ。
突然、脳髄から大きなパルスが流れ落ちれくる。
真はこの波に乗った。乗ったと同時にいきなり、阿字観に入った。
彼は今、大きな月輪の中にいた。

大日如来の思念を真は感じた。
「私はあなたに会うことが出来る」
そう思念したとたん結跏趺坐をした大日如来は目の前に現れた。
真も結跏趺坐をしている。
「私は貴方と重なることが出来る」
これはすべて、瞑想の中の、イメージの世界である。大日如来は、近づいてきて真と重なった。真は大日如来になったのだ。

静かに目を開ける。
目の前に、阿修羅が立っている。
「真、お前は今、地獄にいる」
静かに、阿修羅は言い放った。右手に持つ太刀を、いきなり頭へ振り下ろす。真は避けようとした。
「わっはっはっ・・・」
大音響で阿修羅の笑い声が響きわたる。
「命が惜しいか。これは妄想ではないぞ、この太刀を受ければ本当に死ぬのだ。
リセットなど世迷い言だ。お前はパソコンではない。飛翔など世迷い言だ。」そういうと、いきなり真の腕を切り落とした。
血が滝のように落ちていく。激痛が走った。真の心配が本当になった。
阿修羅の言葉は、ほんの僅かな真の恐怖を見事にとらえていたのだ。
瞑想の中でも死んでしまう。その考えが頭の隅から、中央へ一気に広がっていった。
次の瞬間、右手が切り落とされる。
今度は、もっと激しい激痛が来た。
「うおおおお・・・」
真は倒れそうになった。

ドドーン
立木達は、祭壇の裏にあった、隠し扉をプラスチック爆弾で吹き飛ばした。
荒木は、先にとびこむ。
部屋の奥では、男女がセックスの真っ最中である。
「何だ、こいつらは」
荒木が異様な光景を目にしてたじろぐ。
立木も後に続く。

部屋を見渡し、二人を確認した。
そして、ためらわず女に標準を会わせ、
いきなり、ぶっ放した。

弘子は真の男根が萎えかかっているのがわかった。
必死で腰を振るが効果がなかった。
焦っていた。その時、弘子の頭をマグナムがぶっ飛ばした。
何も感じることのないまま、首なし死体となった。
体だけが一瞬だけ遅く死ぬ。
そのせいで膣は不思議なしまり方をした。
断末魔の動きだった。真の男根をねじるように締め上げたのだった。

真は蘇った。
萎えていたものが、力を取り戻した。
不思議だが、突然大きな命が、真の中になだれ込んできたのだ。
瞑想の中で、真は大日如来になっている。
再び阿修羅が現れた。
「切られると死ぬぞ。」
大日如来は無言でほほえむ。
「そんなに死にたければ殺してやろう」
阿修羅は、太刀を振り上げて頭の上に振り落とした。
如来は半眼のまま、阿修羅の太刀を見つめている。
スローモーションのように阿修羅の太刀は、如来の頭の中を通過していく。
脳から、鼻、目、口、肺、胃、腸、イメージ通りに剣は進んで行く。
ついに、大日如来は真っ二つになった。そして、いきなり目の前が暗くなった。真は死んだのだった。

「荒木、こいつを担ぎ出せ」
立木は冷たく言い放つ。
「はっ」
荒木は首のない弘子を脇に片づけ、真を抱きかかえようとした。
荒木は、瞳孔を調べた。
「この男はすでに死んでます」
「ふん、セックス死か。まあいい。これは俺達の責任ではない」
立木はインカムで沢田へ連絡をする。
「もう、戦いはすんだ。こっちへ来て必要だと思われる物を持ち出せ」
沢田達は、まだ寺の外の木立にいたのだ。立木が二人は足手まといになると判断して、その場にいるように指示をしていたのだ。
「へい、わかりました。すぐ行きます」
紀子と顔を見合わせて、ほっとした。
「助かったぜ。俺達がこんな化け物達と戦おうなんて無理があるんだ。
この俺様は、肉体労働は向いてないんでな」
「早く行きましょう」
二人はへっぴり腰で、立木のいる場所を目指して走っていった。

立木は本部に連絡した。

「標的を捕捉完了。ただし、踏み込んだときにはすでに死亡。標的を持ち帰る。村には、残り70名ほどの住民が潜んでいると思われる。ただちに後続部隊を送り、殲滅作戦を敢行せよ。すべて皆殺しにしろ、以上」
荒木と沢田、紀子はめぼしい資料と思われる物をアタッシュケースに詰め込んだ。
「もういいだろう。荒木、その男に手錠と足かせをつけろ」
死んでいる男にも油断しないのは立木の信条だ。荒木は沢田と紀子に手錠と足かせを渡した。沢田はいわれるままに、裸の真に足かせをした。
紀子も、手錠をかけようとした。ふと紀子は微細な反応を感じた。
- - - -あら、意識のかけらがまだ残っているわ
脳死に至っていないのだろう。念の為スキャンしてみた。
精神を集中し、やさしく真の頭の中へ入っていく。
意識の網を頭へかぶせていくという感じだ。弱いパルスが間をおいて流れている。
全体にはすでに力強さはなくなっていて、死亡と判断しても間違いない。紀子は意識から引き上げようとしたが、ふと赤いパルスの点滅が気になった。
スキャンを始めたときはなかった点滅だ。
頭の中をなで回すように調べていくうちに、突然反応したらしい。
念のため、もう一度赤いパルスのまわりを、紀子の意識の手でなで回す。
撫でまわすうちに赤い色が緑に変わった。今度は点滅していない。
さっきよりはっきりしている。
紀子は、意識の手を急いで引っ込める。
「あのぅ・・・」
紀子が立木に話そうとした。その時に、
パラパラバラ・・・と微かなヘリコプターの音が西の空から聞こえてきた。
後続部隊が到着したのだ。

立木と荒木はドアから出ていく。後続部隊に指示を出すためである。
心なしか部屋の空気が暖かくなった。
「沢田さん、何か感じない」
沢田は突然声をかけられて、ぎくっとしたが、すぐさま精神を集中した。
小動物の警戒反応に似ている。
「紀子、感じるぞ」
紀子は沢田にしがみついた。
「さっきこの人をスキャンした時、何か反応を感じたのよ」
「わかった」
沢田は真に集中する。一応超能力者だ。感受性は強い。
「こりゃいかん。こいつは生き返っているぞ。」
そういうと、すぐさまインカムで立木に連絡をする。

進化

真の体に変化が起きている。
ぼこぼこと体の表面が波打ちだって、何か別のモノに変わっていっているのだ。ぎしぎしと音を立てながら、体のサイズが変わっていく。
Mサイズから、3Lぐらいの変化だ。胸が厚くなっていく。今まで、ほっそりとしていた真の体に、もりもりと、

筋肉が束になって骨にまとわりついていく感じだ。つぼみが一気に花開くように真は、変身を遂げようとしていた。

沢田と紀子は泡をくってドアの外へ逃げ出した。
それと入れ替わるように、荒木が飛び込んで来た。
右手には麻酔銃を構えている。
秘密部屋の真ん中で、注意深く見渡す。
「なぜ、我々を襲うのだ」
部屋の隅から、声がした。
荒木は、声の主を確認せずに、反射的に声の方へ麻酔銃をぶち込む。
撃つと同時に、反対側に身を転がす。体を伏せたまま、撃った方向を確認する。いきなり、銃を持った右手を蹴り上げられる。
麻酔銃は床を転がっていく。強烈な蹴り上げだ。
右手の甲の骨が砕けたようだ。
「お前達は、何者だ」
荒木は注意深く、声の主を見上げた。
そこには、変身を遂げた真が立っていた。
2メートル近い大男だ。
さっき横たわっていた真と同じ人間とは思えなかった。
「お前は真か。どうやって変身したのだ」
驚きを隠せない。
「今のお前に説明しても、わからないだろう」
荒木はむっくりと起きあがった。左手でバンドにさしてあったナイフをすでに握っていた。一か八かでナイフを真の下腹部をねらって突き刺す。
至近距離からの必殺の突きだ。
真は体を開く。今の真は反射スピードがまったく違う。本来なら荒木のナイフが真の腹に刺さっているはずだった。
ごん。
荒木の後頭部へ真の手刀がぶち込まれた。
今の真からみれば、荒木の動きなど超スローもションのように見えている。

その一瞬の戦いの間、立木が飛び込んできて、マシンガンをぶっ放した。
荒木のことなど、考えていない撃ち方だ。
二つの体は蜂の巣になったはずだが、真の姿はそこになく、荒木のぼろぼろの死体が踊るように崩れていく。一瞬の静寂が訪れた。

ひゅん
独鈷杵が右手から飛んでくる。
立木は状態をそらして避ける。
ぐっ
次の無音剣が見事に立木の太股に深々と刺さっている。
得意の2重攻撃だ。
顔をしかめた立木は、ところかまわずぶっ放しつづける。
10秒ほどで、1000発の弾倉は空になった。
部屋の中のすべての装飾は、元の姿をとどめていない。
ぐしゃぐしゃになっている。
「ちぃ」

立木は入り口へ後すざりしながら、弾倉を取り替えた。
ブンと棒が飛んできた。錫である。とっさに機関銃の銃身で払う。
体制が崩れた。尻餅をついてしまったのだ。
後ろに気配を感じたとたん、真に羽交い締めにされてしまった。
立木はうろたえた。あまりにも、スピードが速すぎるのだ。
まるで子供みたいにあしらわれたのが理解できなかった。
「お前達は何者だ」
両腕は、万力のような力で固定されている。
「お前は真か、どうやって生き返った」
「私の質問の方が先だ」
真は声までも変わっていた。立木は自分の不覚さをかみしめた。
だが立木の頭はフル回転している。
「私達は、研究所の者だ。」
「何という研究所だ。」
「日本総理府直属の保健衛生研究所だ」
「なぜ私達を襲う。法師をどこにやったのだ」
「伝染病だ。新種の恐ろしい伝染病がこの村に発生しているとの知らせが入った。そこで私達自衛隊は調査に来たのだ」
「なぜ自衛隊が殺戮をする」
「殺戮ではない。そちらの方が応戦してきたのだ。自己防衛のために攻撃をした」
締め上げられている腕が急に楽になった。
「もういい。すべてわかった。お前達の考えは今すべて感じることが出来た。出来の悪い嘘はもういい」
自由になった立木は、振り向きざまに右肘で真の脇腹をねらった。
真はひょいと身体を開く。右肘の攻撃がブンと空を切る。
「はっ」
勢いのついた体を、右足を軸にして左足のハイキックを真の首元にたたき込む。虎のスピードを持つ回し蹴りだ。
真は右腕でその足をはじき飛ばす。立木は飛び退いた。
真も間合いを取って構える。
「私は、人間とは違う。戦っても無駄だ」
立木はじわりと間合いを詰めてくる。
「ほう、そうかい。やっぱりな。しかし俺も人間を越えているぜ」
いつの間にか、刃渡り20ｃｍほどのナイフを握っている。
すり足で真の右側に回り込む。
注意深く体を向き合わせる。
しゅっとフェイントでナイフがのびてくる。
真が軽くかわす。
タンと立木が間合いを急に詰めてきた。
右手のナイフが動く。
しかしそれはフェイントで、左のストレートが真を襲う。
真は逆に一歩踏み込み、蛇のように伸びてくる腕を肘で跳ね上げ、手のひらの甲で立木の顔面を打つ。裏拳である。
バキッ
頬の骨が折れた音がしたかと思うと、立木が吹っ飛ばされていた。
ぺぇっ
立木は、口の中の血の固まりを吐き出した。
「少林寺か。ちゃちなことをするじゃないか」

真達の一族は、いわいる山伏と同じ修行を積む。格闘技も練習させられている。真は、少林寺拳法を子供の頃から習わせられていた。ただ、それほど強くなかった。今までの戦いも、真は意識していない。
体が勝手に反応するのだった。
真は人間の動きではない。だが頭の中は人間だ。
立木は作戦を変えた。立木というのはいつでも卑怯になれる男だった。それが立木の、本当の強さの秘密だったのだ。

「真とかいったな。戦いはやめよう。お前の強さはよくわかった。だがこの村の住民は今頃、すべてとらえられているだろう。取引をしないか」
真はたじろいだ。
「このインカムで、命令を出せば今すぐ皆殺しできるのだ」
立木は、インカムのスイッチを入れて連絡をした。
さらに真に聞こえるように受信部分のスピーカーをオンにする。
「第2部隊。状況を報告せよ」
すぐさま応答がある。
「こちら第2部隊の平田です。村人は全部とらえて集めています。直ちに射撃しますか」
真の顔がゆがむ。
インカムをはずして、立木が尋ねる。
「どうする。皆殺しには10秒もかからんぞ」
「わかった。お前のいうことを聞こう」
「なかなか聞き分けがいいな。平田。聞こえるか。人質はすべて研究所へ輸送しろ。射撃の命令は中止だ」

立木は座り込んだ。
「真とやら、外で輸送が完了してから、俺達も行こう」
真も座り込んだ。
「どこへ行くのだ」
「研究所だよ。そこで恐い人がお前を待っている」
部屋の中でも、ヘリの音と、車の音に混じって女達と子供達の悲鳴が微かに聞こえる。もう、夜が明けかかっている。
長い一日が始まった。

復活

新宿副都心。
東京セランの自社ビルの地下2階に徐福会の研究所はある。
真は6畳ほどの白い壁の部屋にいた。
部屋のドアの反対側の壁一面が、マジックミラーになっている。
ここには病院用の白いベッドと小さな机と椅子しかおいてない。
真はマジックミラーに向かって座っている。

立木から連れられてきたのは2日前である。
その間、様々な実験をされた。
CTスキャンには、何回もかけられた。
血もたっぷり採られた。
意味不明の実験もたくさんあった。

真は、すべてに素直に従ったのだ。

村の一族は別室で監禁されているようだ。子供も２０人ほどいる。
立木は、時々無事でいる事の証にビデオを見せてくれた。
だいぶ憔悴しているようだが、中間の命は全員無事のようだった。

助け出すチャンスがないまま、２日も経ってしまった。
真は焦っていた。それと自分にどんな変化があったのか知りたかった。
敵が来るのを察知して、弘子と共に瞑想に入った。
瞑想の途中で萎えかけたが、弘子の力で立ち直った。
阿修羅に会い真は殺されたのだった。記憶はここまでである。

気がつくと、見知らぬ男がそこにいた。
そして自分の体が蘇生したことを確認したのだった。
生まれ変わったのだ。だが今は捕らわれの身だった。

「真君、聞こえるかね」
どこかにスピーカーがあるのだろう。声が響いてくる。
真はマジックミラーを見つめた。
「真君、おかげでいろんな事がわかったよ。私と話をしよう。私は稲川乱造という。東セラのオーナーだといった方がわかりやすいかね。」
「東セラは知っている」
「君は、秀才の科学者だったな。それなら話が早い。君は自分のことを知らないだろう。教えてあげよう。ゆっくり聞きたまえ。」
真は座り直した。
「君は、進化に成功したのだ。そう、立川流の奥義でだ。密教の力は知っていたがここまで出来るとは、正直思わなかったよ。しかし、私は密教に興味がない。知りたいのは進化のことだけだ。もう少し協力してくれたら、一族はすべて解放しよう。さて、君の場合だが、君は紛れもない生物だ。神ではない。君は進化のステップの1段目をのぼっただけなのだ。確か君は瞑想中に一度死んでいる。そして蘇った。それはなぜなんだね。教えてくれないか」

真は弘子と話し合ったことを思い出した。
「瞑想とは、イメージの極地だ。我々はイメージの中で仏に会い、神に会う。しかし瞑想が終われば、又元に戻ってしまう。私も科学者だ。私達の遺伝子が、通常の遺伝子とは違うことは知っている。しかし常に不活性なのだ。どうすれば活性化できるのか、それを知ることが私の役目だったのだ」
「隠れ遺伝私論のことは知っていたんだな」
「当たり前だ。我々の一族からは、神や仏が出現していることは法師から聞いている。キリスト、仏陀、マホメッド、神ばかりではない。空海、役小角、聖徳太子などの異能者達、妖怪、鬼、すべて人間でない者は私達の種から生まれているのだ。それは、私達の遺伝子の特殊性から来ることなのだ」
「ほほう、鬼もか。なるほど」
乱造は、興味津々である。真は、自分の思考を整理するように話している。
「地球上の生物のあらゆる力を記録した遺伝子は、不活性のまま私達の種に取り込まれている。ウイルスによる突然変異の可能性が高いと思われる」
「今度はウイルス進化論か」
「そうだ、私の研究ではたぶん人類がアフリカで誕生したとき、我々は人類と枝分かれしたと思われる。つまり私達は、ホモサピエンスといわれているお前達の次の種として誕生したのだ。我々の種はホモサピエンスをアフリカに

残し、新大陸を目指し移動を始めた」
「アフリカのイブのことだな」

人類の祖先は、アフリカの一人の女性から始まったという説が最近発表されている。更に、１００万年前アフリカからユーラシア大陸へ集団で移動した種がいたが、ほとんど死に絶え、現在の人間の祖先はアフリカで細々と生き残った人達だといわれている。
「しかし、私達の種には大きな欠陥がある。その為にほとんどが死に絶えたといわれている」
「欠陥とは何だね」
「自殺遺伝子だ。私達は寿命が短い。それは遺伝子の進化サイクルでは、優位に働くのだが、個体としては成熟した社会を作りにくいのだ。更に子供が一人しか生めない」
「なるほど、遺伝子にとっては個体のサイクルが短い方が進化しやすいし、寿命が短ければ早期の結婚を必然的にするようになる。人間の体は15才ぐらいが、生殖にいちばん適しているらしいな」
「そうだ、私達の種は遺伝子の進化に適応している。しかしホモサピエンスは、個体の生存に適応しているのだ」
「話を最初に戻してくれないかね。真君」
「一度、死んだことか。キリストを知っているか。彼は一度死んでいる。そして復活を遂げた。私の結論はこの復活こそが飛翔の道だと理解したのだ」
「よくわからんが」
「パソコンのリセットだ。新しい遺伝子を活性化させるためには、リセットしなければいけなかったんだ。我々はパソコンと同じで、様々な機能を潜在的に持っている。しかし、それを使うにはリセットが必ず必要なのだ」
「進化種とはパソコンと同じか。そうすると我々は、電卓か、ワープロぐらいの機能しか持っていないのだな。実にわかりやすい説明だ」
「仏教の即身成仏も、エジプトのミイラも、我々のリセットを真似しただけのことだ。そして、私はリセットに成功した」
「なるほど、なるほど。今の君の肉体は、スーパーマンと言っていい体をしている。獣の敏捷性と力をもち、コウモリと同じ、超音波を感じることが出来る耳を持っているぞ。まだある。のどには鰓が隠れている。まさに水陸両用だ。考えてみれば、地球上の生物の能力は、超能力のかたまりといってもいい。脳味噌も１００％近い使用率という結果も出た。つまり、進化とは地球上の生物のすべての能力で頂点に立つことだったんだと思われる。そう思わないか、赤城君」
初めて赤城が話し始めた。
「そうですね。だが、がっかりしました。２００年前なら確かに、神に匹敵する能力でしょう。だが今の人間にとって、科学の力でほとんどの事は克服してきました。時代遅れのスーパーマンなら必要ありません。しかし、研究素材としては一級品ですね。神様を研究できるのですから」
「その通りじゃ。それでは真君、また合おう。そうそう一族のことは赤城君に一任した。これからは赤城君のいうことを聞くのだな」
それ以来、乱造の声はしなくなった。

しばらく、スピーカーから何も聞こえなかった。
白い部屋の真はじっとしていた。マジックミラーには、黙り込んでいる真の姿が映っている。上半身裸で、至る所に絆創膏が張ってある。
実験と称して、あちこちを切り刻まれたあとだった。2メートル近くの体格に、筋肉の束が張り付いている。不意に、スピーカーのスイッチが入った。
「真君、今度は私が相手だ。よろしく」
真は目をつむったままだ。
「スーパーマン君。何を考えているのかね」
赤城はおどけた声で話し出した。

「もう一つわかったことがあるよ。君たちは密教というもので変身を遂げたが、不活性遺伝子を活性化させる物質がほぼ判明したよ。それは何のことはない。アドレナリンだった。立川流とはセックスの快楽を利用しての変身だ。快楽とは私達からいわせると化学作用の一つなんだ。異常なまでの快楽が、こいつを多量に分泌させる。これが活性化物質の元になる。火事場のくそ力なんていうだろう。私達人間も、同じような作用を持っているのだ。まあ、一回君たちに立川流のセックスを見せてもらえば、ほぼ正確にわかるだろう。クックックッ」

赤城は興奮していた。凄いおもちゃを手にしたと思っているのだ。

また、赤城は淫猥な性的趣味を持っている。つまり、ＳＭプレイにはまっているのだ。まさに今回は、趣味と実益を兼ねた楽しい仕事となった。

真はゆっくり目を開けた。

「赤城君とかいったね。私達のことはよくわかっただろう。私達は君たちと同じ生物だ。神ではない。しかし、私達の役目はわかったかね」

重々しい声だ。神の声とはこんな声なんだろう。人間の音声をモノラルとすれば、真の声はサラウンド方式のハイファイステレオ音声なのだ。赤城は、その声に圧倒されたが、高慢な姿勢は崩しようもない。これが性格なのだ。

「役目？　生き物に役目はない。あるのは生存本能だけだ」

「違う。我々の種は人類の監視者として機能するのだ。この２日間の間、私には様々な情報が入ってきた」

「情報だと」

赤城の声がだんだんヒステリックになっていく。

「人間にはわからないが、なぜ私達の体が地球上の生物の能力を持っているかというと、それは情報収集のためだ。植物、動物、魚、虫、アメーバー。様々なもの達は各自に情報網は持っているが、他者に伝えることが難しい。わかりやすいように話そう。各生物間ではパソコンでいうフォーマットの違いから情報をやりとりできないのだ。だが私達はすべての情報を受け入れることが出来るのだ。今でいうインターネットみたいなものだ。私達種族は、ネットワークの中心となるサーバーみたいなものになったのだ。この２日間、空気中に含まれている、におい、小さな虫達、花粉、様々なものが、私の頭脳サーバーにインプットされている。そしてほとんどのことがわかったのだ」

「さすがはスーパーマンだ。虫や花粉のお友達とは思わなかったな」

「赤城君、進化とは何だと思う」

「小学生並の質問だな」

「進化とは情報の伝達なのだ。命というのも情報を伝達していくものにすぎない。地球になぜ命があふれているのか。そしてそれらはなぜ食らい合って生きているのか。こんなおぞましい星は、宇宙にない」

「さすがは神様だな。今度は宇宙論か」

「私達の命そのものも、一つの情報なのだ。生きるのがＯＮ、死ぬのがＯＦＦ。地球はコンピューターのように宇宙に信号を送り続けていくのだ」

「ほう、それは、初耳だな。しかし誰に信号を送るのだ」

「それは、違う命へだ。そしてネットワークを作るためにだ。それが地球の使命なのだ」

「宇宙人とのネットワークづくりか。壮大な計画だ。しかし、何のためにそんなことをするのだ。すると私達も、その信号の一つなのか。生きたり死んだりするだけで人類の使命は終わるのか。ばかばかしい」

「それが真実なのだ。私には今はっきりわかったのだ。様々なものがそれを教えようとしている」

「それならそれでいい」

「その地球のコンピューターの中で、今バグが発見されている。原因は人間種と思われる。予測できない自体が起こっているのだ」

「バク？　わかりやすい指摘だな。いい加減にしろ。人間は地球が生み出した生物だ。我々が地球の王者でいることが、なぜバグなのだ。それは創造主の計算済みのことだろう。」

「そうだ、バグが出ることは計算済みなのだ。だからこそ我々の種がいる。我々は地球のバイオコンピューターの自動修復機能だ」

「我々人間には、生物的な欠陥はない。クロマニヨンから生物的に少しの進化もしていないのだ。何も変わっていないのだ」

「それは一元的な見方だ。我々にはお前達の欠陥がわかる」
「もういい、作り話はたくさんだ。お前達はただの突然変異の化け物だ」
赤城は、ヒステリックな声を上げると急にスピーカーを切ってしまった。

真はすっかり、顔つきが変わっていた。
たった1時間の問答の間に、自覚したのだった。
目は鋭く見開かれ、口元は引き締まっている。裸なのに気づいたのか、ベッドの白いシーツを体に巻き付け、シーツの端を破りひもにしてバンド代わりにした。そして静かに立ち上がった。
マジックミラーにうつる真の姿は、まさしく不動明王のようだ。

一族達は、5つの部屋に分けられて収容されていた。
立木達にとらえられ、子供達を人質にされた一族は、いわれるままに、ここに収容されたのだった。しかし、真の飛翔はみんなが感じ取っていた。一族達はすべて進化種である。昨日の夜から、一族みんなに不思議な活力がみなぎり始めていた。それは真が進化種として十分目覚めた時からであった。
進化の不思議というのは、一つの種に個別的に起こるのではなく、いっせいに起こると考えられている。それは1個体の突然変異だけでは、生き延びていく可能性はゼロに等しく、生物種間に不思議な連携が考えられている。
また、進化による変化も、徐々に起こったかのように思われがちだが、たとえば、目などという複雑な器官ができあがるときは、突然すべてができあがらなくては、機能を発揮できないことからみて、やはり劇的な変化が生物に現れると考えられている。

2日目の朝、一族は眠りから目覚めなかった。70人ほどの子供、女、男達、すべてが静かに眠り続けていた。見張りの守衛が異変に気づいたのは、朝8時過ぎてからであった。異変は研究室に報告されたが、真の取り調べで、赤城がいなかった。連絡が赤城に入ったのは、結局、昼過ぎであった。

「馬鹿野郎。なぜすぐ知らせなかったのだ。」
赤城は、先ほど真の尋問で頭にきていたのだ。そこに、間の抜けた報告で、完全にキレた。2人の部下を連れて、地下収容所直通エレベーターに飛び乗った。赤城は、尋常でない異変を感じとった。一族が、眠りから覚めないのは、種に集団進化が訪れたかもしれないのだ。真の進化が引き金となって、抑制された、不活性遺伝子が目覚めた可能性がある。「シンクロニシティ」つまり種の同時性が現れるかもしれないのだ。
「あんな化けものが、いっせいに誕生したら、えらいことだ。」
エレベーターが開くと、赤城は走った。一つ一つのドアの監視窓から、確認して回った。確かに眠っている。いや死んだようにも見える。
「子供達の部屋をあけてみろ。」
部下は急いでドアを開け、10名ほどの子供達を調べた。
「所長、すべて死んでいます。」
赤城は、真っ青になった。
「よし、一人だけ手術室へ運び込め。残りはそのままにして、すべてのドアに見張りを3人ずつつけろ。それから、立木と会長にこの事を報告しろ。早くしろ。」
素早く指令を下すと、いちばん小さな子供を抱き上げた。
「いよいよ、進化の瞬間を調べることが出来るぞ」
事の重大さとともに、研究者としての興奮がわき上がってくる。
「急げ、急げ、急げ」
赤城の声は、収容所に響きわたった。
10分後手術の準備が完了した。

「よし、解剖するぞ。」
助手が、メスを赤城に渡したその時である。
スピーカーから、声が聞こえてきた。
「オン、バザラド、バン」
「オン、バザラド、バン」
「オン、バザラド、バン」
不気味な声である。赤城は叫んだ。
「あれは、真の声だ」
「オン、バザラド、バン」
「オン、バザラド、バン」
低く、強く流れているのは、真言である。それも、金剛界の大日如来の真言だ。しかし誰もその事はわからない。

低く、強く流れている。その呪文に反応がついに現れた。
死んだはずの子供の体に赤みがさし始めたのだ。
「所長。子供が生き返りました」
助手が驚いて、叫んだ。確かに、心拍が戻っているのがモニターで確認されている。さらに子供の体の表面が、ぼこぼことうねり始めている。
「よし、睡眠薬を打て」
助手が手際よく、注射器を取り出して、子供の腕に注射針を差し込もうとした。しかし、針は子供の腕に刺さらなかった。
皮膚が極端に硬くなっている。見た目は柔らかいのに針を通さないのだ。
助手は焦った。何度も場所を変えて差し込もうとした。
結果は一緒である。ついに針を折ってしまった。為すすべもなく、赤城は子供の変化を見守った。
ぼこっ
子供の背中が大きく盛り上がった。
ボコッボコッ
あまりのことに、みんな口を開けたままになった。
「羽が、羽が生えてきた」
子供の背中には、真っ白な大きな羽が生えてきたのだ。それは、まさしく天使の誕生だった。

アスラ

都内の一人用のマンションに住んでいる立木は、真をとらえた後、体調が急に悪くなった。初めての経験だった。真を見た時からのことだ。戦いの時は何も感じなかったが、研究所へ連れて帰った後、急に吐き気に襲われた。胃の中のものをすべてぶちまけても、気持ち悪さは収まらなかった。寒気がして熱が出た。それも40度近い熱だ。顔から脂汗がしたたり落ちる。医者に連絡して来てもらったが原因不明とのことで、鎮静剤と、吐き気止め、胃薬、ビタミン剤、ありったけの薬をおいて帰っていった。入院を勧められたが、立木は大声で怒鳴りつけたのだった。入院など会長にしれたら身の毛がよだつ。
体力には絶対の自信があった。傭兵時代も、自衛隊時代もその自信は崩れることはなかった。不撓不屈とは、自分自身のためにある言葉だったのだ。精密検査も、3ヶ月おきにやっている。酒も飲まないし煙草も吸わない。体力の落ちることなど、まったく興味がなかった。
ところが今夜は違った。
まるで、死に行く子羊のように、苦痛にのたうちまわっていた。苦痛に疲れ果てて、いつの間にか眠ってしまった。

夢を見た。深い夢だった。
黄金の蛇が、自分の体の中を食い尽くしていく夢だった。白い蛇がいた。小さなかわいらしい蛇だった。その白い蛇に、黄金の蛇がからみついてきた。
そして、白い蛇を頭から飲み込んでいく。
ごく、ごくっ
音まで聞こえてくる夢だった。

そのまま気を失ったようだ。夢の中で、気を失ってしまったのだ。
まるで死んだ気分だった。長い時間が経ったような気がした。
そして目が覚めた。枕元の携帯電話が鳴っていた。
完全に蘇っていた。
普通の音がやけに鮮明に聞こえる。
今まで聞いたことのない感覚だ。回りの音がモノラルから、スーパーファイファイ音になったような感覚だ。携帯電話は研究所からだった。進化種一族が、仮死状態に入ったとのことだった。ぴんときた。
ぞくぞくっと来た。
さあ、出番だ。立木は、ベッドを飛び起きた。

研究所の扉を開けると、シンとしている。
立木は、くんと臭いをかぐ。今朝から、こうであった。
今まではこんな事はなかったが、無意識のうちにやっているのだ。臭いの微粒子の中に、真とその仲間達の臭いがむせかえっている。血の臭いもした。汗の臭いもした。その臭いの濃さで、ある程度の状況が判断できる。
突然微かな声がきこえてきた。
「隊長・・・・。」
軍曹格の坂本だった。受付の机の下でうずくまっている。
「不動明王が・・・会長室に・・・」
虫の息で答える。立木はにやりとした。
ゾクゾクするのだ。
「遂に逢える・・・」
部下の銃を取り上げると、いちばん奥にある専用エレベーターに乗り込んだ。
ここだけは、プッシュホンのようなボタンが付いている。会長室への暗証番号を打ち込む。とたんに、ドアが開く。
「まってろよ。」
立木は会長室へと運ばれていった。

ドアが開く。ＶＩＰ階だ。通路の突き当たりが会長室だった。
「ほほう、役者は全部そろっているな。」
臭いでわかったらしい。つぶやきながら、無造作にドアを開けた。
広い客室には、会長の乱造と生意気な赤城がソファーのすみに座らせられている。そして、会長の椅子には、真が悠然と座っている。
まわりに、筋骨たくましい男達が10名。子供が3名。女が2名いた。
ドンと来る威圧感がある。
「アスラ」
真は立ち上がる。
アスラと呼ばれた立木は、ニヤリとした。
「また逢えたな」
乱造と赤城は唖然とした。立木がまるで別人のようだからだ。

アスラと呼ばれた立木は、やはり進化種だったのだ。ただ純血種ではなく、人間との混血である。ふつう進化種は人間と交尾しても、その遺伝子は不活性のまま終わるので発覚ほとんどない。もちろん、進化種達は、厳しい戒律の中で暮らしており、寿命が短いので人間と接することは非常に少ないが、恋に落ちた男女は駆け落ちして種から離れることもある。立木はそんな祖先を持つ一人だったのだ。ただ人間との交配種は、まれに突然変異を起こすのだが、劣性の面が強く出てしまう。鬼だとか、夜叉、妖怪のたぐいは彼ら達なのだ。

だが、このアスラと呼ばれた立木は違っていた。性格以外は進化種と同じ能力を持っているのだ。全世界に、何人か存在していた。サタンもそうである。まさに堕天使なのだ。遥か何千年か前、このアスラ達は神、仏と呼ばれている進化種と戦ったといわれている。そして滅んだはずであった。しかし、進化種が復活すると、必ずアスラも復活するのだ。プラスとマイナス、陰と陽、光と影、これこそ地球生命が持つ大きな謎の一つだろう。

真の奇跡ともいえる「リセット」で進化種の「シンクロニシティ」の引き金を引いたのだ。

真とアスラは向かい合っている。
不思議な圧力に、空気は熱く、火花を散らしている。
なんとプラズマが発生しているのだ。
これから、何が起こるのか。
誰も想像は出来ない。
地球はこれから新しい局面を迎えているようだ。
進化種の本当の意味と、アスラの存在。
神と悪魔の戦いが再び始まってしまった。

世紀末

１９９９年2月。世間では7月に起こるといわれている世紀末の大予言、「ノストラダムス」の「恐怖の大王」の事で、テレビ、ラジオがおもしろおかしく大騒ぎをしている。ほとんどの人々が、信じていないのにも関わらず、世紀末の恐ろしげな話題に心の引っかかりを感じているのだ。

何か起こるんじゃないか…

誰もが感じている漠然とした不安。それが世紀末だ。

真の衝撃的な復活からすでに5ヶ月たっている。真は復活を遂げた一族を引き連れ、葛城山の山奥へ籠もった。葛城山は奈良県西部、金剛山の東斜面一帯の地域にある霊山である。役小角という修験道の祖は、この大和国葛城山に住んで修行したといわれている。不思議な霊気を持つ山であった。そして葛城山は真言立川流一族の聖地だったのだ。

車道からだとほとんどわからないが、注意深く歩くと、笹がわずかに踏み分けられた、けもの道がわかる。そのけもの道沿いに20分ほど分け入ると、至る所に真言が書かれた板きれや紙が、見えないように樹木に貼られている場所がある。結界を張り巡らしているのだ。その結界の中心には、3階建てのコンクリートの建物があった。九州の宮崎にある「天地寺」と造りは全く一緒である。ただ違うのは、小さな看板に「葛城自然科学研究所」と書かれている点だけだった。

研究所の中は、ハイテク機器が並べられており、パソコンが5台ほど常に稼働している。インターネットも専用線でつながっており、時折ファックスがカタカタと音をたてている。全て真が以前準備していたものだった。真は立川流を受け継ぐ真言僧だがアメリカのオックスフォード大学の助教授をしていたほどのインテリでもある。やることにそつがないのだ。なんと総本山の、九州宮崎の天地寺の完全なバックアップを作っていたのだ。もちろん非常時の為

のものだったが、昔からパソコンになじんでいる彼ならではの発想ともいえるだろう。このビルの中に総勢80名ほどの仲間がひっそりと潜んでいる。

今年の山の冬は寒く、そして静かだった。

新宿副都心の東京セランの自社ビルの地下2階。徐福会研究所の会長室でアスラとしてよみがえった立木との遭遇。あの時は警察と消防のサイレンが鳴り

響き、ビル中が大騒ぎとなっていた。研究所の防犯ベルが警視庁に直通になっており、会長の乱造か所長の赤城かが通報ボタンを抜け目なく押していたのだろう。

変身を遂げた真達は、駆けつけた武装警官達をあしらうようにやり過ごすと、研究所所有の大型のライトバンで一路奈良県へ向かったのだ。立木も、共に会長室から煙のように消え去った。「アスラ」も復活を遂げたばかりで、人間社会と接触をまだ持ちたくなかったようだ。

真達は世界に散らばっている一族と連絡を取り合っている。やはり、各地で進化現象が起こっていた。進化は同時に進行していたのだ。真の奇跡ともいえる「リセット」で世界中の進化種の「シンクロニシティ」の引き金を引いたらしいのだ。現在、日本で進化が具現したのは一族の約１／２０で、総数50名ほどだった。真達は、進化のおかげでスーパーマンといえる能力を獲得している。しかし、それは神になったわけではない。あくまでも生物としての枠を持っているのだ。確かに、彼は自分をリセットによる変身を成功させた。しかし、これから、どういう風に行動すればいいのか考える必要があった。また、立木という存在も気になった。彼が「アスラ」ということは直感でわかった。

アスラというのは日本でいう阿修羅のことで、帝釈天という神様と戦った悪魔のことである。キリスト教でいうなら堕天使ルシファーすなわちサタンだ。共に、もと神の一員であったのが悪魔になって、神様に反抗したとなっている。しかし、アスラと出会っても、深い憎しみより懐かしさを感じた。いやもっと親密な感情かもしれない。「悪魔」に親しみの情が何故わくのだろうか。

一族に伝わる言い伝え通りに、仏へと変身したのなら、人間を遙かに超越した存在になるはずだ。ところが、今の自分は生身のスーパーマンである。

もし、拳銃で撃たれたのなら死んでしまうだろう。

一族に伝わる伝説と微妙にニュアンスが食い違うのだ。私は戦うために再生したのだろうか。あの「アスラ」と戦うためにだろうか。

いろんな矛盾が一度に吹き出してきた。

真は自分の肉体が変化したことを科学的に確かめるため医療チームを結成した。自分自身の五感が異常に発達したことを実感していた。しかし、これが進化なのか、変態なのかという科学的な検査の結果を知りたいと思ったのだ。

自分の身体が一回りも急激に大きくなり、様々な変化が起きているのに、進化と盲信できないのだ。

真は、科学者である。遺伝子レベルでの変化や数値が気になるのだ。

一族の言い伝えである神の遺伝子が復活したと、みんなは思っている。

いや信じ切っているのだ。我々は世界を救うために神として進化した一族なはずだ。この思いは、みんな一緒であろう。しかし真には心の中に引っかかるものがあるのだ。

その時、インターフォンが突然叫んだ。

「真さん、大至急、第3室まで来て下さい」

美雪のアナウンスだった。

インターフォンのスイッチを送信に切り替える。

「何があったんだ。」

「美春がついに出産しました。元気な女の子です。ところがそのこの頭に、奇妙な痣があるんです。」ひどくおびえた声だった。

「美春」というのは、妊娠中に変態が起こった幹部の一人である。変態が起こった時期が、妊娠三ヶ月だったのだが、胎児に異常はなく順調に育っていっていたのだ。出産予定より、2ヶ月早いのだが、これだけの急激なからだの変化が起きているので、医療班に万全の態勢をとらせていたのだ。

妊娠９ヶ月での出産は、早産なのだが産まれてくる子供が、変身後最初の子孫で、真も注目していたのだ。
「いますぐいく」
真は部屋を飛び出して医療棟第３室へ急いだ。

美春はすやすや眠っていた。母胎には異常はなさそうだ。
生まれたばかりの赤ちゃんは保育器に入れられていた。
保育器の回りでみんなは立ちすくんでいた。
「どうしたんだ。詳しく状況をはなしてくれ」
はっと我に返った美雪は真をみるなり早口で叫んだ。
「赤ちゃんの頭に」
真は、保育器をのぞき込んだ。健やかな綺麗な顔をした赤ちゃんだった。
ゆっくりと体中をチェックするが特別な変化は現れていなかった。
頭を見るが、薄い頭髪があるだけだ。角度を変えて頭のてっぺんに目がいった時、痣らしきものが、あるのがわかる。
もっとよく見ようと目を近づけたとき、はっきりと痣の形がわかった。
なんと、つむじが頭のてっぺんにあり、その回りに
文字が書いてある。いや文字ではなかった。
「６．６．６」という数字だった。
真は一瞬息をのんだ。
そう、あの悪魔の数字の６．６．６だったのだ。
「この子はいったい…」
真の頭は混乱してしまった。

立木は東京都内、新宿のビジネスホテルにいた。
真達の変身に伴い、自分の身体に変化が起きた。
細胞の隅々が活性化されて、体中に力がよみがえることがわかった。
ただ、時折、すごい睡魔におそわれ、倒れ込んでしまうこともあった。
時折、高熱が津波のようにおそってくる。
病気にかかっているようだ。
冷や汗がひっきりなしに出てくる。
たちの悪いインフルエンザにかかったようだ。

深い眠りだった。
記憶の螺旋がほどけていくような感じだ。
夢の中で遠い声がする。
「アスラ、目覚めよ」
「わたしはアスラか」
「そうだ」
「おまえはだれだ」
立木は混沌の中でたずねた。
「私は命だ」
声は答える。
「私は、全ての命だ。ついに神が目覚めた。私たちを滅ぼしに来たのだ。私たちを救えるのは、アスラ、おまえしかいない。思い出すのだ。永き時間を」
「神とは何者だ…」

立木は混沌に意識があることに気づいた。そして問う。
「神とは命亡き者だ。そして神とは滅ぼすものだ。我々は滅ぼされる。アスラよ。おまえは命の望みなのだ。神の前に立ちふさがるのだ。神と戦え。今度こそうち負かすのだ。」
その声は、立体感がまったくなく、遠くとも近くともいえる。
ただ、確信に満ちた、聖なる声とだけは理解できた。
立木の頭の中に突然、閃光がひらめいた。
「おう、お、思い出したぞ」
何度かの混沌の意識との対話の時間が遂にアスラをよみがえらせた。
ウォ
ウォウォ
ウォ
ウォ
ウォウォ
ウォ
ウォウォウォウウォウォオオオオオ・・・・・・…

立木はがばっと跳ね起きた。
「アスラ」として遂に覚醒したのだ。
ベッドから立ち上がった立木、いや「アスラ」は仁王立ちになった。

何度かの昏睡状態の内に、変態を繰り返していたのだろう。
美しい黒髪に、褐色に輝く肌がアポロンのようだ。
均整のとれた肉体に、涼しい瞳がうるむ。
あの凶悪な立木とは想像も付かないほど、身体全体がシャープになっていく。まるでゴリラから、チーターのように変身していたのだ。
立木の変身は、「命」の輝きそのものだった。
「私は命だ。そして神は破壊者だ。」
アスラは確信した。

カルフォルニア海洋生物研究所
ヘレンのオフィスはここ半年の間、様々な情報が送られてきていた。
パソコンを見つめ、データを処理している。
キーボードの横に置いてある、インスタントコーヒーを入れたマグカップを時折口にもっていく。縁なしの眼鏡の奥の目の回りは、徹夜続きで少し黒くなっている。
ふぅーとため息をつく。
「マリー。なんか食べない。もうすぐお昼よ。」
奥の机で同じ様なパソコンでの作業していた助手のマリーが顔を上げた。
「そうね。ピザでもとりましょうか」
「私はアンチョビが良いわ。」

それにしても、集まってくるデータがどれもこれも、突拍子もないものばかりだった。古生代の種の復活という「カンブリアシンドローム」と呼ばれる現象の本格的調査が大詰めにきている。古生物アカデミーへの報告の期日が迫っているのだ。
カルフォルニアの死体で捕獲されたアノマロカリスの幼体に未発見のウイルスが発見された。だがアノマロカリス自体が謎だらけである。詳しい比較など出来るはずもない。

しかしこのウイルスが原因だろうということは間違いない。

全て変身した生物達は、このウィスルに感染しているに違いないのだ。まるで風邪を引いたようにあらゆる生物がウイルスに感染した結果、こんなでたらめな変態を起こしているのだ。ダーウィンの進化論など頭から無視している。原始帰り現象かともおもわれたが、５億年前の閉ざされた進化の実験場ともいえる形態に戻るということは、考え自体に無理がある。

これは、新種のウイルスによる感染症と考えた方がよかった。しかし、感染症といっても、生物が別の種に短時間に変形するなどというのは、今まで見たことがなかった。

進化そのものの学説が、根底からひっくり返されることになる。

原因不明のウイルス性熱病で死んだ20体の猿の調査の結果、これらの猿の染色体の数はすべて46だった。

もしこれらの猿達が、生き残れば人間になってしまったのかもしれない。

エイズのように人間に広まるおそれがある。まさにバイオハザードと呼べる緊急事態となる。

「ゴッドウィルス」

進化を促進させるウイルス。彼女はそう命名した。

彼女は、メールを密かに出した。アドレスはｍａｋｏｔｏ@ｔａｃｈｉ．ｏｒ．ｊｐ

ヘレンが只一度だけ本気で愛した男、

日本にいる真のところだった。

バイオハザード

立木は、新宿のビジネスホテルを引き払い、自宅へ戻った。

まるで別人のようになった立木は、着替えるために戻ったのだが、スーツがどれも体に合わないのだ。厳つい筋肉の固まりだったときの体型が、いかに変形したかよくわかるのだ。

彼は肉体だけではなく、精神も大きく変わってしまったらしい。

今までのやぼったい服など、見向きもしなかった。

結局、家にある金を全て持って家を出た。行き先はデパートの高級ブティックだ。

２時間ほどで、靴から髪の毛まで整えたその姿は、どんなモデルよりも美しかった。センスの良さも、群を抜いている。もし彼がパリを歩けば、パリのファッションデザイナーがこぞって服を着せたくなるだろう。その美貌は生身の人間ではあり得ないだろう。進化種達の変身における容姿は東洋と、西洋では微妙に違っている。しかし、美しいという点では共通している。

美しさは神の印だ。

人類が「美」という物に神々しさを感じる特質を持っているのだ。当然、抜群な美的感覚が遺伝子に組み込まれていても不思議はなかった。

彼が目指すのは、元の職場、東京セランの自社ビルの地下２階。徐福会研究所の会長室だ。

先ほど、携帯電話でアポイントを取っておいた。

ビル内は過剰ともいえる警備がしかれている。

立木にとっては職場だったところだ。悠然とビルの中を進んでいく。

要所要所に配置されている警備員は、そんな立木をチェックする。

本来は自分の部下である。しかし、彼らは変わった立木を確認できないのだ。苦笑しながら立木は進んでいく。

会長室には東セラのオーナー、会長の稲川乱造と、あの生意気な赤城が待っていた。

防弾仕様のドアが開く。

立木をみるなり、二人は驚いた。

「おまえは本当に立木なのか」
冷静で老獪な稲川でさえ眼鏡をかけ直して、立木をまじまじと見つめた。
狡猾な赤城は、機関銃のようにわめき立てた。自分の理解できない事態に出会うと、幼児的な性格が一気に吹き出すようだった。
「会長、こいつはあの立川一族の仲間ですよ。あの時「阿修羅」と呼ばれているのを確かに聞きましたよ。「阿修羅」というのは悪鬼のことですよ。立川達が神でこいつが悪魔なんです。近寄るととんでもないたたりがありますよ。その証拠に、昔の立木さんとは似てもにつかないじゃないですが。こいつは化け物のドラキュラだ。やい。化け物。何のようで私たちを呼びだしたんだ。」
赤城は、ただの悪ガキになっていた。
立木は、優雅にソファーに座って二人に向き合った。細身のタバコを取り出して、デュポンのライターで火をつける。映画の一シーンのようだった。
「まあまあ、赤城さん。僕は正真正銘の立木ですよ。だいぶ見た目が変わりましたが、間違いありません。」
「嘘いうな。元はそうかもしれんが、あいつらと同じように変身した化け物
だ。」
赤城は、完全に舞い上がっていて、少々うるさかった。
そんな赤城を手で制し、今まで黙っていた乱造は重い口を開いた。
「立木、おまえの変化の説明をしてくれんか」
立木は、会長と向き合った。
「会長、いや稲川乱造さん。確かに、僕は生まれ変わりました。阿修羅という名で呼ばれたのは本当です。しかし、私はあなた方の敵ではないんです。あの神と呼ばれた者達こそ人類の敵です。それはその内わかるでしょう。私があなた方とあう必要があったのは、会長の力が必要だからです。会長は総理とご懇意でしたね。日本国が滅ばないようにするには今の内から手を打たなければならないんです。」
「ほう、日本が滅ぶ?それは聞き捨てならんな。」
乱造の眉間にしわが寄った。
「ウイルスですよ。人類が滅亡するウイルスを立川達、いやあの神々の一団が巻きちらすのです。」
「ウイルス?　それはエイズみたいなものか。」
「そうです。ただエイズみたいな半端なもんじゃありません。確実に人類は滅亡するのです。あの恐竜みたいに」

いままでむすっとしていた赤城が、又動揺したように突然話し始めた。
「恐竜だって。恐竜がウイルスで滅んだっていうのか。どこにそんな証拠があるんだ。それに、その殺人ウイルスは神様達が試験管で作り出すのか。ばかばかしい」
立木は微動だにしない。

「立木。おまえ達の変化は、まさに神がかっている。ワシも驚いた。
しかし、見た目のどんな変身でも今の自然界でも十分説明ができる。
何らかの原因で、たぶん芋虫から蝶になるように、ヤゴからトンボになるように変態したのだろう。
しかし、変態を遂げたとたん新しい記憶と、知識が備わるなんて科学的に証明が出来ない。妄想だと思われてもしょうがないんじゃないのか。」
乱造はあくまでも冷静なのだ。
立木はもう一度椅子に座り直した。
「会長、私が変身したのもウイルスのせいですよ。今地球上には、不思議なウイルスが蔓延しているのです。もちろん一般の人々には何の影響もない無害なウイルスです。
ところが、こいつはある種の人間に反応する。つまり、特別な生物だけに感染する。つまり、僕たちみたいな進化種と呼ばれる一族に、過激な変身を起こさせるものです。そう、さなぎから蝶のようにです。
会長が、この現実を理解できなくて当たり前です。

しかし人間の脳味噌は90パーセントしか使われていません。つまり、人間がわかってることなんかほんのわずかなんですよ。私の蘇った記憶に間違いありません。後天的に得た情報は人間には、次の世代に伝えることが出来ません。しかし、私は進化種と呼ばれるものです。あなた方には理解できない事が可能なんですよ。」

「おまえ達からすれば、私たちは未開人なのか。」

「そうです。私とあなたとはそれほど生物的な開きがあるのです。

しかし、私は人類のたった一人の味方です。

神と呼ばれた者達。彼らは世界各地で復活するでしょう。もちろん「進化種を目覚めさせるウイルス」によってです。目覚めた彼たちは、役目があるのです。

今後、一定期間を経た後、第二の覚醒をするでしょう。

それは殺人ウイルスのばらまきの為です。

これは防ぎようが無いでしょう。殺人ウイルスは、人間にとってどんな作用を及ぼすか今はわかりませんが、人類にピリオドを打つものです。彼たちが復活したのはそのためなのです。」

乱造は驚いた。

「ちょっと待ってくれ。彼たちは進化種として人類の上に立ち、地球に君臨するのじゃないのか。」

「違います。彼らは破壊者です。それ以上の役目はありません。」

「それじゃ地球は誰の手に移るのか。」

「それはわかりません。しかしそのために私が存在するのです。私は神を経たウイルスに感染しません。やはり、神と同じ構造をしているからです。更に、私には神のウイルスを更に変化させる体質を持っているのです。

私のウイルスに感染した者は、神のウイルスに対抗できるのです。

私は、神と戦うために存在しているのです。そして、これまで幾度も、神の目を盗んで命を持続させてきたのです。今度も、彼らと戦わなくてはなりません。それが宿命なのです。」

「まてよ、立木がウイルスに感染しないというなら、すぐにでも、ワクチンが作れるのではないか。」

「今の時代ならそれが出来るかもしれません。そのために赤城さん、あなたが必要なのですよ。」

急に自分の名前が出てきて、本人がびっくりした。

「それなら、あのカンブリアシンドロームは何なのだ。彼ら達が現れる以前だぞ。」

赤城はあくまでも反抗的だ。

「あらゆる生物相の進化種に進化と呼ばれる突然変異が起きているのです。おそらく生物界も新種のウイルスの感染症が起きているのでしょう。今人類の中で発生しているエイズなどは、余震みたいな物でしょう。いや神々を復活させる為のエピローグなのかもしれませんね、」

「しかし、わからないことが一つある。なぜ今神々は復活したのだ。」

「たぶん、地球という環境の中で、人類は暴走しすぎたのかもしれません。神の出現は私の想像を遙かに越えていて、理解できないのです。地球規模の事なのか、宇宙規模のことなのか不明です。しかし、神の出現で、命は誕生したのです。カンブリアの生物大爆発や恐竜の絶滅、人類の誕生。全て彼らの出現によるものです。人類は神の出現で、劇的な生態系の変化ののち、生き延びた命なのです。奇跡的に適応したのです。神の存在は、私を含めてウイルスという生き物に関係があるのかもしれません。」

乱造は考え込んでいる。

「どうだ、赤城。理論的にはどうなのだ。立木の説明に真実味はあるのか。」赤城はじっと考え込むような顔をしていたが、頭だけは天才的な科学者であることは間違いではない。今、猛スピードで仮説の構築をやっていたのだ。

「会長、この男のいうことも、残念ながら一部信憑性があります。ウイルスの脅威はエイズなどで十分知られているとおり、人類を滅亡させる生物兵器としては完璧に近いと思われます。もし風邪のように空気感染するとしたら防ぎようがないでしょう。

次に、変身した直後、過去の知識を得たという話ですが、全然でたらめというわけでなく、大腸菌の実験で獲得形質が遺伝するという実験の報告があり、未知の生物では知識が遺伝するといった事柄も全くのでたらめでないことはいえるかもしれません。

また、ウイルスによる進化は日本の１９７１年に慈恵医科大学の中原英臣博士がとなえた、生物はウイルスに感染して進化するという考えは少数の支持を得ていますので、ある程度、科学的な根拠があると思われます。

神と呼ばれる進化種ですが、個体数が何百という数字では進化した生物として固定化される個体数としては絶望的なほど少なすぎますので、一時的な突然変異と見たほうがいいでしょう。彼らが悪性化するウイルスの宿主、もしくは媒体という話ですが、エイズがアフリカミドリザルから人間に感染したという説が一般的になっていますので、違う生物にウイルスが入り、悪性の病気を広めるというのは理論的にはかなりの信憑性があります。」

騒がしい赤城も、理論を展開するときはいかにもインテリらしい。

「うーむ。いずれにしても、人類最悪のバイオハザードということじゃな。しかし、バイオハザードなら、10年前に完成した、バイオシェルターで対抗できるじゃろ。赤城、総理に連絡して万一の事態の危機管理を詳しく伝えよ。立木が変身したのが幸いだったかもしれん。ワシらは恐竜ではない。ウイルスごときに滅ぼされてたまるか。神々のことはまた対策を練ることにしよう。まだまだ資料不足じゃ。」

「さすがは会長。これは地球規模のバイオハザードです。神達がどんな行動に出るかは、今の時点では不明ですが、十分気をつけて下さい。」

立木はしおらしくいった。

さらに赤城にむかった。

「赤城さん、私は阿修羅ではありません。本当の名はアスラというです。阿修羅というのは後の神話で悪魔の代名詞のように語り継がれています。しかし、本当はアスラ族という神と同列の種族なんですよ。もっとも、族といっても今は私一人しか存在しませんけどね。」

ぞくりとするようなウィンクを赤城に投げかけた。

赤城の背中に官能のインパルスが走った。

アスラのすごみのある美貌に、開いた口がふさがらなくなってしまった。

弥勒の誕生

美春は真の従兄弟にあたる。

真達の一族は、戒律のせいで長い年月の間に知らずに血が濃ゆくなってしまっている。その為日本以外の同族と結婚させる習慣があった。そのせいか西洋人の血が混じっており、みんな彫りが深くエキゾチックな美男美女が多いのだ。そんな一族の中で、美春はとびきりの美人だ。去年、インドの一族の王子と婚礼が決まり、無事懐妊して日本に戻ってきたのだ。婚礼といっても、一緒に住むわけではなく、その血筋を絶えさせないための古来からの知恵であった。

そんな美春の子どもだ。

何か重要な意味があるはずなのだ。

「６６６」の数字のことは「新約聖書」の「ヨハネの黙示録」第13章18節には、次のように書かれている。

「ここに、知恵が必要である。思慮のある者は、獣の数字を解くがよい。その数字とは、人間をさすものである。そして、その数字は６６６である。」

つまり、単純に考えれば、この子は悪魔ということになる。

真は、どのように理解すればいいのかとまどっている。

軽い失神状態にあった、母親になった美春が我に戻った。

「赤ちゃんはどこ」

「ここですよ、保育器の中にいますよ。元気な赤ちゃんですよ。」

そういって保育器をベッドに近づけようとしたとき、看護婦が「あっ」とさけんだ。

「どうしたんだ」
看護婦は赤ちゃんの股間を指さしていた。
そこには、何にも付いていなかった。

「しんじられん」
性器の付いていない人間などいるはずがない。
「どうしたの…。ミロクはだいじょうぶなの」
美春は心配そうに真に聞いた。
「美春、この子の名前はミロクというのか」
「そう。私のあかちゃんが生まれた瞬間、私の意識はどこかへ飛んでいっていたの。
気が付いたら、真っ暗な空間の中に大きな球が浮かんでいたの。最初は一つだったけど、どんどん分裂していくの。
まるで曼陀羅のようになっていて、その中心にある球から、声が心に響いてきたの。
その声は、こういったわ。「ミロクじゃ。弥勒が生まれたのじゃ…」そういっていたわ。」
「この子が弥勒…様か。そういえば生まれたばかりだというのに、泣きもしないで、ほらにこにこ笑っているぞ。
この子が生まれたのは大きな意味があることだと思われる。よし、みんな万全の介護体制をとるように」
真は、そう指示して医療室をでた。

部屋に戻るとインターフォンで秘書にすぐさま連絡をした。
「藤堂先生をここへ呼んでくれ」
藤堂というのは一族の医師だった。彼に私たちの進化の変化を詳しく調べさせていたのだ。
何分か後に藤堂がやってきた。中年の温厚そうな医師であった。
「真様、およびですか。」
「うん、藤堂先生。私たちの診査の結果と、ミロクの誕生について、あなたの意見を聞きたいのだ。」
藤堂は、大きくうなずき、ピースの缶を取り出して、煙草にマッチで火をつけた。
大きく煙を吸い込むと、気分を落ち着かせながら話し始めた。
「真さん。はっきり言いましょう。一族の変身は、確かにゴッドウィルスが関与しています。私も一族ですがその兆候がないのは、やはり血の純血性と個体差にあるのでしょう。変身した一族の血液検査をしてみましたが、間違いありません。真さんの研究テーマである、「隠れ遺伝子」の論文は私も読みましたが、今回のウイルスは、このゴッドウィルスが隠れ遺伝子の引き金を引いたと言っていいでしょう。」
真は尋ねた。
「私は、瞑想によるリセットの方法で、隠れ遺伝子の引き金を引いたはずだった。立川流の秘技である性交を弘子と行った。その結果の変身じゃないのか。」
真は、弘子のことを思いだした。
彼女の柔らかな笑顔と、その愛情を思い出せば、今でも涙が出てくるようだった。
そして彼女の献身的な行為で蘇ったのは事実だったからだ。
もしウイルスの感染だけで、進化できるのだったら
今まで修行してきたことと、弘子の努力が何の意味もなかったことになるのだ。
藤堂はタバコを小さな灰皿に押しつけて潰した。
「たぶん、真さんは今回の出来事の水先案内人といった立場にあったのではなかったかと思われます。進化の不思議の一つに同時性というのがあります。ただの突然変異ならば、どんなに良性の変化でも、ある程度の個体数がいなければ生き残ることは出来ません。どういう連絡方法なのかはわかりませんが、誰かが、自力で進化を遂げる。これがこのゴッドウィルスのスタートなのでしょう。
そこなんです。不思議なことに真さんの変身は、ウイルスのせいではないんです。真さんの検査結果を見ても、どこにもウイルスを発見できないんです。つまり、真さんは自力で進化を遂げたのです。
今回のウイルスは、一族の覚醒を促しましたが、真さんだけが、ウイルスの影響を受けていないんです。

これがどんな意味を持っているのか、はっきり言って私にはわかりません。今回の出来事は私が学んできた、医学の常識を遙かに越した、異常事態なのです。
残念ですが、お役に立てそうもありません。」
実直な藤堂医師は、実にすまなそうに真にいった。
「そうですか。」
真は神の意図が全く分からない自分に腹が立ってきた。
自分自身で進化の扉を開けたつもりだった。
しかし、これまでのことがまさに仏様の手のひらで踊らされている、孫悟空の様な存在に思えてきたのだ。
長い沈黙の後、藤堂医師は帰ろうと腰を上げた。
真は、ふと我に返った。
「先生。もう一つ聞きたいのですが。ミロクのことです。ミロクの無性はどんな意味があるのでしょう。」
藤堂医師はまたまた困った顔をした。
「ミロク様ですね。精密検査をしましたが、真様と同じようにウイルス感染の兆候は全くありません。また、無性であること以外どこも異常ははありませんでした。更にミロク様は、進化種ではないんです。ごく普通の人間の様に思えるんです。」
「普通の人間・・・ですか。」
「そうなんです。無性というのは何か意味があるのでしょう。しかし、
ミロク様がもし弥勒菩薩様の生まれ変わりなら、どんなことがあっても不思議はありません。
我ら一族の変身とミロク様の誕生。まさに予言どおりではありませんか。人類救済の時が今訪れたのです。」
藤堂医師は一族の中でも、きわめて冷静な男だった。しかし、この異常事態に今までの知識が追いつかないことを理解していた。
「そうだな。我々は大きな神の意志に動かされているのだ。」
真は大きく深呼吸した。
ついに来るべき時が来たのだ。

ミロク

ミロクの誕生は一族に確信めいた空気を醸し出していた。
一族の長である真が何の行動も起こさないのだ。みんなのいらだちや不安が
重苦しく漂っている。
そんな中で、唯一ミロクの成長が一族に期待を抱かせているのだ。
ミロクは保育器の中で驚くべき成長を遂げている。
乳児というのは猿のような顔をしているものなのだが、ミロクの場合は生後三日目で、何とも愛くるしい顔立ちをしていた。さらに保育器から出して、美春は母乳を与えようとしても、ミロクは母乳をほしがらなかった。
藤堂医師は、ミロクを何度も検査したが、きれいな内臓があるだけだった。
ミロクが何故食事をしないのか。栄養源はどうなっているのかは、さっぱり解らなかった。
最初、美春はお乳をほしがらないミロクに狼狽したが、藤堂医師らの医療班の綿密な診察と助言で、もう慣れてしまったようだ。性器がないことも知れ渡っていたが、考えてみれば仏様は男でもなく女でもないのだ。誰ともなく「弥勒菩薩」の誕生を確信していたのだ。
「ミロク」は弥勒菩薩様だ。
一族みんなは、口に出さないけれど、そう思いこんでいた。
ミロクは誕生して1ヶ月ほどでなんと立ち上がっていた。体つきも5才ほどの子供の身長になっている。

そして、生まれてから66日6時間後に、言葉を発したのだ。赤ちゃんの声ではない。それは、言葉と心に同時に届く声だった。
ミロクはつぶやくように言葉というか、音のようなものだったのだが、なんども繰り返す内に、はっきりとしたメッセージとなった。
分厚いドアのある医療室からそのメッセージはまるでテレパシーのように
どんどん広がっていったのだ。
「人に会え、そしてふれよ。我らが、彼ら民の道をしめすのだ。」
荘厳なる空気が一族の頭の中に直接伝わっていった。

真はその声を修行堂で聞いた。
静かに瞑想を続けていた真の心の中に「ミロク」の声が聞こえてきたのだ。
その心の声を感じたとたん、真は様々な雑念が解消していった。
今まで、悩んでいたのが嘘のように、晴れやかなものが心の中に充満していた。更に使命感のようなものが芽生えてくるのだった。
一族の第二の覚醒が始まったのだ。

進化した神々は遂に行動を起こした。
それは移動することだった。
渡り鳥が集団で出発するように、変身した一族の者は、何の連絡をしなくとも、研究所の玄関に集合していた。
みんな、晴れやかな顔をしていた。
今まで身体は変身したけれど、心の中は不安や恐れでいっぱいだったのだ。
それがミロクの声で何かに変わったのだった。
今までの人格が一掃されて、神という自覚が芽生えたのだ。
今はもう悩むものなど誰もいなかった。
人に会わなくてはならない。それが使命として心の中に充満していた。

布教

朝靄がまだ残る、すがすがしい朝だった。

みんな思い思いの格好をしていた。
真は一歩を踏み出した。
みんなも真について歩き出した。
目的地は東京だった。

ただの行進ではない。神々の行脚だ。
全てスーパーマンのような体力を持ち、
身体は均整がとれ、堂々としていて神々しい。女性もいるが、
弁天の生まれ変わりである。
絶世の美貌の持ち主もいる。
彼らは、植物、動物、昆虫との意志疎通も可能なのである。彼らが発する声は、独特のヘルツを持っており、様々な生物がよってくる。
彼らの回りは、蝶や小鳥、それも、白鷺や鶴、ハトなど平和や神秘を連想さ

せる色とりどりの動物達が彼らの回りに集まってくるのだ。
昼には彼らの一団は、国道に出てきた。
彼らは黙々と歩き続けていた。

行進から2日目、テレビ局の中継車
が集まってきた。珍しい宗教団体の行進だったと思ったらしくコメディアン
の突撃レポートの段取りだった。
「こちらは突撃レポートのラクダーズのひろしです。昨日からニュースで取り上げられている不思議な団体の行進をレポートします。おっ、やってきました。やってきました。歩いているのですが、すごいスピードです。
全部で30名ぐらいでしょうか。先頭には大柄の男性が歩いています。身なりは白い布を全員まとっています。まるでインドの僧侶がつけている衣のようです。何かの宗教団体でしょうか。もしかしたら、あのオーム教の残党かもしれません。それではインタビューしてみましょう」
レポーターは一団が来るのを待ち受け、真にマイクを突きつけた。
真は、レポーターを見つけると足を止めた。
そして、道の脇にある広い公園に入っていった。
みんなも、同じように公園に入っていく。
真は黙って芝生の中央に座った。
回りのみんなも、めいめいいろんなところに腰掛ける。
休息ではなく、レポーターと話をしようとしているらしい。
真達が公園にいると、綺麗な鳥達が集まってくる。
まるでお釈迦様が座禅していると、森の動物が集まってくる風景に似ていた。さらに犬や、猫、りす、いろんな小動物がこの一団を慕うように遠巻きに集まっているのだ。
不思議な光景だった。テレビ局の一団はぎょっとしているらしい。
気を取り直したレポーターは、カメラが回っているのを確認すると、覚悟したように話しかけた。
「もしもし、あなた方は、どういう団体なのですか。この行進の目的は何なのでしょう。」軽薄な話し方が、いかにもワイドショー的だった。
真が口を開いた。
「私たちは、あなた方を導く者だ。私たちはあなた達を救えるだろう。私は須弥山（スミセン）を目指している。他の者達は、それぞれ逝くべき道を行くだろう。」
須弥山とは仏教の世界説で、世界の中心にそびえ立つという高山のことだ。レポーターは大げさに驚いて見せた。リアクションのおもしろさで売っているタレントなのだ。
「なんという一団でしょうか。やはり宗教団体のようです。いっていることは意味が分かりません。しかし、この一団は全て美男美女なんですよね。それにこの集まっている動物達も不思議です。どういう仕掛けなのでしょうか。おや、きれいな女性がいます。ちょっと彼女に聞いてみましょう」
テレビに映らない所にいるディレクターが盛んに指示を出しているのを確認したからだ。
テレビカメラが無遠慮に女性を映し出した。顔がゆがんで写る広角レンズが意地悪くローアングルから狙っている。しかし、鼻の穴が丸見えのアングルでも、彼女がひときわは美しいことを伝えてしまう。
レポーターはその美貌に驚いて見せた。
「何という美人でしょうか。こんな女性がなぜ集団の中にいるのかきいてみましょう。」
「すみません。ちょっと良いですか。あなた方の団体名は何というのですか。」
話しかけられた女性は涼しい瞳でレポーターを見つめた。
すれっからしのレポーターが、マジでどぎまぎしている。
「私は吉祥と呼ばれています。」
鈴のように美しい声だった。
「きっしょう、ですか。不思議な名前ですね」

「あなたは、悲しみを持っていますね。それは貧しさと病気でしょう。」そういうと、優しく、レポーターの目をのぞき込み、静かにレポーターの手を触った。その瞬間、レポーターの様子が変わった。

何ともいえない歓喜の表情をして見せたのだ。そして、その場にへたりこんでしまった。

スタッフの中にいたディレクターらしき中年の厳つい男が飛び出してきた。

「なにをしたんですか。」声は荒い。品のない、だみ声で吉祥を威嚇した。レポーターに危害を与えたと思ったのだ。

吉祥は、６人ほどのテレビスタッフを見つめた。そして軽く手を振った。

テレビ局一団は、まるで雷に打たれたようにレポーターと同じように座り込んでしまった。まるで魔術みたいなものだった。

手を合わせて土下座をしている者もいる。

真はそんな場面を見ると、すくっと立ち上がった。そして静かに出発した。

一族は、テレビスタッフを公園に残し立ち去った。

吉祥というのは吉祥天のことである。もとバラモン教の女神で、のちに仏教に入った天女だ。顔かたちが美しく、衆生に福徳を与えるという女神の事である。彼女の進化は、美の女神らしくその美貌とフェロモンである。彼女の至福フェロモンは体内から分泌・放出されて、人間の行動や生理状態に影響を与えるのだ。この場合、彼女の濃厚なフェロモンの影響により、強烈な至福感を味わったのだろう。

驚いたのはテレビ局だった。生中継でのトラブルだ。テレビカメラがストップしたので大急ぎでＣＭを入れたのだが、不思議な光景と美女を見た視聴者から問い合わせが何千と来て、ワイドショウの電話はとっくにパンクしている。あまりの反響の大きさにテレビ局は驚いた。

公園で座り込んでいるディレクターの携帯電話がさっきから、10分間も鳴り続けている。やっと我に返ったディレクターは鳴り続けている携帯電話の通話スイッチを入れた。

「もしもし、なんですか」ひどく間の抜けた話し方だ。

「何ですかは、ないだろう。たけちゃん。なにがあったんだ。」

たけちゃんと呼ばれた中年ディレクターは、少し考えながら話し始めた。

「彼ら達は、神様だよ。正真正銘の神様だ。あの女性は吉祥天さまだ。あの瞳を見たら真実が直感的に分かったのだ」

「何、もう一度いってくれ。吉祥寺がどうしたって。もしもし、もしもし」

たけちゃんは通話ボタンをオフにした。そしてスタッフにいった。

「さあかえろう。神様が世直ししてくれるぞ。これで世界がかわるんだ」

みんな、てきぱきと機材を片づけ始めた。みんな顔がさっぱりしている。

吉祥天の強力な催眠効果はテレビをとおしても効果絶大だったらしい。

日本人の心を揺り起こすような美貌は、まさに女神を具現した傑作だろう。

各テレビ局は一斉にロケチームを組んであの不思議な一団の元に走った。

国道を集団で歩いているのだが、早々と道々に数々の人々が土下座して拝んでいる。車も完全に脇に寄せてストップしている。グループの後ろには何百人も、白装束をきたお遍路さんや、太鼓を打ちならす宗教団体が付いてくる。

テレビ局は、車でそばまでやってくるのだが、途中でエンジンが止まったり、テレビ機材がおかしくなったりで、そばへ近づけない。この一団が発している、強力な電磁波のせいである。彼らの静電気は尋常ではないのだ。半径百メートルはその影響を受けている。

だから、真がそばを通ると時計が止まったり、何かとショートして火花が散ったりするのだ。本当は身体に電気を持つ生物など地球上たくさんいる。例えば南アメリカの河に産する、長さ約二メートルの電気鰻は三〇〇～八五〇ボルトを現実に発電する。彼ら達の進化は、物理学的にも、生物学的にも、地球上で起こっている現象の寄せ集めに過ぎない。しかし、この人間の姿で様々な現象が起こると神様の奇跡に思えるのだ。

真達は、大きめの神社や仏寺があると必ず休憩をとった。そこには何千人者の人々が、神様を一目見ようと集まっ

てくるのだ。

真達は、効果的なパフォーマンスをだんだん大規模に展開していた。

羽の生えた、鳥に特化して変態をした子供が、みんなの前で衣を脱ぎ飛んで見せたのだ。もちろん身体の変化は構造的に鳥と同じなので、ワシと同じように自由に飛べるのだ。しかし、それが人間の姿をした子供の場合、まるで天使に思えるのはしょうがない。しかし、民衆に対しては効果抜群だったのだ。

大きな翼を大きく羽ばたきながら、神社の境内に舞い降りる姿を見た年輩の一団は石畳の上に土下座して、頭を地面にこすりつけている。

「なんまいだ、なんまいだ、ありがたや、ありがたや」

一人がこう念仏を唱えると、回りにいる何百という人々が一斉に土下座を始めた。

こんな光景が超望遠のテレビカメラで日本全国に映し出されていた。

聖者たち

東京都麻布にある謎の豪邸があった。この土地に５００坪の敷地の中に立てられている、稲川の自宅であった。回りは高い雑木で囲まれていて、中の様子はほとんど分からないようになっている。この家の地下には秘密の核シェルターが作られていた。今、核シェルターの中には、稲川乱造と赤城、そして立木がいた。

「馬鹿騒ぎが地上では起こっているな」

稲川乱造は苦い声でいった。

立木も、モニターの前に座っている。

「彼らは、世界中で出現しています。宗教を利用したうまいパフォーマンスです。彼らみたいな変種が地上に現れると、現在の社会機構では警察などの防衛機構が関知して、犯罪者として抹殺されるおそれがあるのを熟知しているからでしょう。いきなり、神という演出を使えば、かなりの時間が稼げます。彼らはすでにウイルスをまき散らしているでしょう。私たちも対策を早く立てねばなりません。」

「うむ、その事は赤城に段取りを任している。

立木、少し疑問が出てきた。あの進化種どもの目的は殺人ウイルスのばらまきにある。それはよくわかる。今まで人間に無害なウイルスも彼奴らを触媒に変化するのだ。まだ、そのウイルスの効果はわからんがの。ただ、この芝居じみたパフォーマンスは、誰の指示でやっておるのか。誰かみんなを操っている者がいるのか。」

「会長。彼らの本能には、渡り鳥のようなものがあるのかと思われます。つまりある程度変化が落ち着くと、その本能が目覚め、目的の場所へ移動するのでしょう。民衆に対するパフォーマンスは特別組み立てられたものではなく、その時その時の対応の結果でしょう。彼らは変態するまで、現代人だったので彼らにすれば、自然なものでしょう。ただ黒幕といえる者がいるのかもしれません。」

「ふむ。彼らは自然の営みが生み出したものだ。自然のやることはわからん。私たち人類も自然が作り出した傑作だとおもう。しかしそんな種を自然は滅ぼそうとしている。それも納得がいかん」

「会長。人間の身体にも、似たようなことはあります。人間の細胞はある程度役目を果たしたらしぬように設定されています。自殺遺伝子とよばれるものです。ただ時折、暴走して死なない細胞があるのです。」

「うん。ガン細胞のことだ。そうすると我々人類は地球の中のガン細胞ということか。だからこそ抹殺する必要があるというのだな」

「そう考えた方がわかりやすいでしょう。」

その時インターフォンがなった。

「会長、赤城です。彼らのウイルスの感染者を拉致しています。立木を実験室までよこすように指示して下さい。」
「うむ、わかった。立木行くんだ。滅びゆく定めの人類にも、何らかの道が残されているはずだ。もしかしたら、彼らがばらまくウイルスに対抗して生き延びることが、本当の神の意図かもしれないのだ。立木の出現もプログラム済みかもしれんからな。」

立木は黙って立ち上がった。彼も実はそう考えていたのだ。私は神と戦う宿命にある。只の突然変異ではないのだ。神の攻撃を出し抜いて生き延びることこそ、本当の使命なんだと。

会長の前では立木で通すが、それ以外はアスラだ。
彼は、3重に密閉されたドアをぬけ、研究室へ行った。分厚い強化ガラスの奥に赤城が待っている。いよいよ、神の作り出したウイルスにあうのだ。
やはり三重に密閉された研究室に入った。いやな顔をした赤城が完全防御のバイオハザード用のビニールスーツを着込んでいる。とんでもない臆病者だ。赤城はアスラのことを全然信用していない。しかし、会長には絶対服従だった。
「阿修羅」
赤城はアスラのことを必ずこう呼んだ。
「この奥の部屋に、あの進化種達のウイルスが感染していると思われる人物を監禁している。残念ながら何度検査してもウイルスは特定できなかった。本当にウイルスは存在するのか。」
赤城はいらいらした口調でアスラに詰め寄った。
「それでこそ、神のウイルスだ。今の人類の科学力をしてもわからないのはしょうがないことだ。」
アスラは涼しい顔をして答えた。
こんな顔が赤城は気にくわないらしい。しかし会長の命令でもあるので、いっさい逆らうことが出来ないのだ。
憎々しげに赤城は話す。
「その男は現在の所、きわだった症状が現れていない。それどころか、非常に他の細胞が活性化しているんだ。このリポーターは慢性の胃潰瘍だったらしいのだが、接触後、自然治癒している。更に薄くなった頭髪が生えてきている。そのほかにも、若返り的な効果が現れているのだ。本当にこのウイルスは殺人ウイルスなのか。」
赤城はパソコンの資料を見ながら、疑わしそうにアスラに聞いた。
アスラは、昔のことを思い出すように話し始めた。
「うむ。つまり、このウイルスは急速な細胞の活性化を促すのだ。その結果、本人は若返り、病気は治癒し一時的に非常な健康体になる。しかし、急速に命を燃やしていることになる。その後、二次症状として常時、脳内モルヒネが多量に分泌されるようになる。そして自然死をする。発病して1年後には死ぬのだ。」
「それでは、病気のような苦痛はいっさいないのか」
「そうだ、むしろ幸せになるだろうな。しかし確実に死ぬ」
「さすがに神のウイルスだな。かかりたくなる病気だ。」
アスラは無造作に研究室に入ろうとした。
「ちょっと待ってくれ。最後に確認したい。阿修羅が神のウイルスに感染するとウイルスの方が変異を起こすといったな。阿修羅のウイルスはどんな症状を起こすのだ。」
アスラはちょっと考えた。
「厳密にいうと、かかってみないとわからない。前回の戦いはかなり昔のことだったからな。大気の変化もあるし神のウイルスも微妙に変わっているだろう。ただ一ついえるのは、1年後には死なないということだ。どういう変化が起こるにしろ、神と対抗できるのだ。時間がない。入るぞ。何時間かかるかわからないが、俺がＯＫを出すまで、ここは封鎖しとくように」

赤城は黙り込んで、首を縦に振った。
アスラは強化ガラスの向こうに消えていった。

世界中に似たような現象が起きていた。キリストがイスラエルで復活したり、モハメッドがよみがえっている。エジプトではモーゼ、ギリシャではアポロンが現れていた。よく考えると、内容が統一していないのだが、宗教というのはいともたやすく、その非合理性を埋めてしまうのだ。

ただ一つ一致しているのは、彷徨していることだ。聖地と呼ばれる場所を目指して進んでいるのだ。特にキリスト教圏の騒動はすごかった。各地で暴動が起き、パニックを引き起こしていた。エルサレム近郊の丘。つまりキリストが十字架の刑に処せられた地、ゴルゴダの丘に突然、神とおぼしき13人の集団が現れたのだ。キリストらしき人物の頭には茨の冠をかぶっており、そこを動こうとはしなかった。各国々に、不思議な能力を持つ人物が30人ほど突然現れた。彼たちは真と同じ能力を有していた。

要するに生物的なスーパーマンであった。最初、彼らはその地にとどまっていたが、ある一定の時期が来ると、各人バラバラに移動し始めた。彼らの神々しさと、美しさは特筆されるものであり、彼らは鳥や、獣、虫などと話が出来るように見えた。やはり、身体には強力な静電気が常に帯電しているらしいのだが、それを制御出来るようだった。彼ら達は全て穏やかで、静かだったが誰の目にも、まるでロールスロイスがすごくゆっくり走っているようなパワフルな雰囲気が感じられるのだ。彼らに触れたものや回りにいるだけで、全ての病気が治癒していくのだ。更にどんどん健康になっていき、若返りをしていくことだけは同じだった。次第に彼らを神と呼ぶ人々があふれだした。彼らはそう呼ばれても否定はしなかったので各宗教の聖人達の名前を付けて呼ぶようになった。

世界中のテレビ局と報道機関は我先に、この聖者達を追いかけ始めたのだった。あっという間に世界中は大混乱の渦に巻き込まれた。

しかし、世界中はこれまで、人類が経験したことのない、至福の時代が訪れていた。

世界中のジャーナリズムは、最初面白がって、こぞってかき立てたが、半分は辛辣な事ばかりだった。しかし、3ヶ月もするとその影響力は驚異的なものとなった。神達の回りに行くと、確実に病気が治るのだ。エイズもガンも見る見るうちに治癒するのだ。これほどの奇跡が、現実に起こっている。世界各国は一斉に本格的な調査に乗り出した。

各国政府の諜報部隊は秘密裏に盛んに動いていた。

しかし、人類よりも優れた能力がある集団というだけで、それ以上は憶測のみで何一つわからなかった。

神々がばらまいているウイルスは現在の医療レベルでは発見すら出来ないのだ。

しかし、全ての世界の人々が歓迎しているのではなかった。悪意を持った集団がたくさんいるのだ。至る所で神々に対するテロが頻発した。

アメリカにも神々の一族が出現していた。30名者もの天使達の一団はカリフォルニアからニューヨークを目指していた。彼らは全て背中に大きな羽が生えている。彼らが進んでいく道は大騒ぎになっていた。

ある時、テロリスト一団が車で神々の列へつっこんできた。ところが50メートル手前でエンジンがストップしてしまった。そのままだれも出てこないので警官がおそるおそる車のドアを開けてみると、中にはあらゆる毒虫におそわれた、テロリスト達が3名息絶えていたのだ。神々は虫や鳥、動物達と自由に交信が可能なのだ。神々にはテロリストの来ることは、すでにわかっていた。虫達は神々の指示通り、車についている様々なコードを食いちぎり、サソリや、蜂、毒蛇などは車の中のテロリスト達に一斉に襲いかかったのだ。つまり、神々は人間以外のあらゆる生き物からガードされていたのだ。

人類は、人間以外の動物達の本当の恐ろしさを知らなかった。イヌの嗅覚、虫の飛翔力、毒を持った生き物、これらが神の意志で統一された動きをすると、強力な軍隊さえひとたまりもないのだ。ハイテク機器は、コードを小型の昆虫に全て切断され使いものにならなくなってしまう。考えてみれば死を全くおそれない動物達の攻撃など人類は今まで考えたことなどなかった。そんな動物に守られた神々を攻撃できる人間などいやしないのだ。

神々に悪意を持っている人間達は、秘密のうちに行動不能になっていたのだ。アフリカ、ヨーロッパ、中近東、アジア、ロシア、日本、オーストラリア、アメリカ、中南米、あらゆる文化圏で彼ら達は突然現れ、わずか3ヶ月でその影響力は絶大なものになった。現在まで紛争が絶えなかった、アフリカ、中近東、東ヨーロッパなどの国々に現れた聖者達はいつのまにか、紛争を集結させてしまった。聖者達が通るだけで、あらゆる兵器が使用不可能になってしまう。さらに自然に戦闘能力が衰えるのだ。次第にだれも武器を持つものがいなくなった。

神々達は現在も行進を続けていた。そしてその神々の数は正確に６６６人だった。

感染

アスラは、次の日研究室から出てきた。
インターフォンで赤城に連絡を取った。
「阿修羅か、どうだ成功したか」
アスラの声が弾んでいた。
「いいか、これから各国の女性達を出来るだけ多く集めるのだ。なるべく美人で健康的な女性をだ。」
突然の申し出に赤城はびっくりした。
「何をする気だ。」
「いいか、私の身体で変異したウイルスは、空気感染しないのだ。なぜかわからないが、変異の段階で伝染力が極端に落ちるのだ。だから性交による精液の感染しか方法がない。これから私は、種馬のように女性にこのウイルスを感染させるために性交を繰り返す。私のウイルスは卵巣が好きなのだ。」
「おまえ一人でか」
「大丈夫だ、私の体力と性交能力は無限に近い。一晩で１００人の女と寝ることが可能なのだ。その女が男と性交をすれば、その男達は必ず感染する。私のウイルスには強力な淫行増進の作用がある。感染が起これば必ず性交せずにいられなくなるのだ。あっと言う間に感染者は増えていくだろう。時間がもったいない。さあ、会長に頼んで女達を準備するのだ。これからが本当の戦いだぞ。」
赤城は、半信半疑ながらも会長の元へ走っていった。

そのころ稲川は自分の企業グループだけでこの問題を処理することは不可能だと決断し、世界のトップシークレットと会談を繰り返した。しかし、もうすでに神々のウイルスは政界にも蔓延しているらしく、まともに話せる人物はいなくなっていた。稲川は神のウィルスの感染力のすごさを過小評価していたことを認識したのだつた。

アスラが性交渉を持った女性達は確実にアスラウィルスを感染させられた。
もともと美人ばかりだったが、感染後にはその美しさにひときは磨きがかかっていた。彼女たちに誘われて断る男性など世界中にだれも存在しないだろうと思われる。彼女たちは稲川の指示により世界中に配置された。

彼女たちと交渉を持った男性は、確実に感染した。
感染した男性は、保菌者になりそれをまた他の女性にうつしていった。
アスラの言うとおり、発病後すぐに強力な淫行作用が感染者には現れ、何人もの女性と飽きることなくセックスを続けていくのだ。
アスラの計画は順調に進んでいた。

赤城はどんなことがあっても、このシェルターから一歩も出なかった。
極端に臆病なのだ。ひとりで3重に扉をつけた無菌室で暮らしていた。
元々変わり者だったが、最近は特にひどくなってきたようだ。
夜が来て、完全に除菌された、レトルトカレーを食べ終わると
一人で定位置のソファーに座り、テレビをつけた。
このまま、ブランディを飲みながら眠たくなるのを待つのだった。

アスラがつれてきた全ての女性と性交を持ち、全て送り出して、今のところするべき仕事はなかった。
うとうとし出した。
いつの間にか眠ったようだった。
夢を見ていた。
美しい女性が現れた。
彼女は彼にまとわりついてきた。
強烈な刺激が下半身をおそった。
赤城は彼女を抱きしめ、胸をまさぐり、パンティをはぎ取った。
彼女はいやがるそぶりは見せず、積極的に赤城の言いなりになった。
赤城は勃起した、小さな陰茎を彼女の下腹部の秘所に挿入した。赤城のセックスはまるで中学生のマスターベーションと同じだった。一気に絶頂を迎えそのまま果てた。
彼女は静かに去っていった。
はっとして赤城は目が覚めた。
あまりにも、リアルな夢だった。
ふと見ると、赤城はズボンを脱いでおり、性交の後のように陰茎は精液でまみれていた。
赤城は血の気が引いた。
今のは現実なのか、夢なのか全く判断つかなかったのだ。
これは阿修羅の仕業なのか。
ドアは開いた形跡がなかった。

赤城の件はアスラの仕業だった。
アスラにしてみれば朝飯前のことだ。感染者の変化を身近に見るための実験動物として赤城に感染させたのだった。

赤城は2日間、アスラの前に顔を見せなかった。
3日目、アスラの部屋に赤城が現れた。
その表情は、脂ぎっており、極度の興奮状態にあった。
「阿修羅、貴様は俺に感染させたな。」
すごみのある声でアスラの胸元をつかんだ。
「知らないな。おまえが勝手にかんせんしたんじゃないか」
「うるさい。俺の人生がめちゃくちゃだ。最初からお前のことは気にくわなかったんだ。悪魔の言うことなんか聞いちゃいけなかったんだ。殺してやる」
赤城は隠し持った、医療用のメスをアスラに斬りつけた。
アスラは少し身体を傾けただけでかわす。
トンと、赤城の手首をたたいた。
赤城のメスはいとも簡単に床に落ちた。
アスラは赤城の襟をつかんで耳元でささやいた。
「このままだとどっちみち死ぬことになるんだ。すぐは死にたくないだろう。俺の言うとおりすれば長生きできるんだ。」
その声に赤城はがっくり首を垂れた。
「わかった・・・」
情けない声だった。
アスラは続けて話す。
「赤城、女が欲しいんだろう。わかってるよ。
町へ出て、片っ端からやってこいよ。」
「ああ・・・」

赤城は、夢遊病患者のようにシェルターの出口へ向かった。

変身

アスラがばらまいたウイルスは、各人に様々な変化をもたらした。
最初は淫行作用により、エネルギッシュになるのだが、４日目あたりから身体に変化が出てくるのだ。
それは、本人が気絶するくらいおぞましい姿だった。
コウモリの羽が生えたもの
頭にヤギの角が生えたもの
人間の身体に獣の姿が映し出された、異様な姿ばかりだった。
まさに悪魔の姿だった。ウイルスの作用は基本的には神のウイルスと同じなのだが、その姿が人類の美意識と反対の方向にあるのだった。
どんな神話に出てくる怪物よりも、おぞましく醜い姿だった。
これが、死なない代償なのだ。
しかし、変身したもの達は、気が狂ったように騒ぎ出した。
実際に狂ったものもいた。
街にはおぞましい悪魔の姿をした生き物が出没するようになった。

そして世界中でも同じ現象が起きていた。
全ての宗教は、神に対抗する怪物達が必ず存在していた。
その姿が、まさに現実となっていた。
人類は恐怖の坩堝にたたき込まれた。
まさに人類と悪魔の戦いが展開されたのだ。
人類は怪物達が現れたことにより、人類史上一致団結をした。
そして、神々の存在を完全に認めたのだった。

悪魔の姿に変身した一団は群をなして移り住んだ。
姿は異様でも、中身は人間である。
食事をしなくては生きていけないのだ。
しかし、この姿では普通の店では食べ物を売ってくれるものなどいなくなった。
彼らは仕方がなく、徒党を組み夜に食料店をおそったのだ。
毛むくじゃらの狼男、コウモリの羽が生えたドラキュラ、蠅男、まさに恐怖の怪物達が食べ物を求めて闇夜を闊歩したのだった。

赤城はフラフラと電車に乗り新宿まで出てきた。
空は青く、ウイルスのことなど誰も気にしていないようだった。
相変わらず、人は波のようにあふれ出てきて、どこかへ押し寄せていっている。赤城の目はうつろだ。
阿修羅の言葉が耳鳴りのように、残っているのだ。
自分の生死など今まで考えたことがなかった。
ゆるゆると回りを見渡すと、
こいつらは一年後みんな死んでいくんだ・・
そんな妄想が実際に沸いてくる。
ふと、目の前を若い女性が通った。
条件反射のような性欲がゴンとわいてくる。

無意識のうちにポケットの財布を確かめる。
確か50万ほどつっこんできたはずだった。
厚みで、確認する。
これまで赤城は女に持てたことはなかった。
女は金で買うものなのだ。今32才なのだが
そう信じ込んでいるのだ。
赤城はフラフラとミニスカートの後をついていった。

3時間後、ラブホテルから赤城は一人で出てきた。
「ちぇ、10万も取りやがって。」
唾をペッと道にはいた。
しかし俺はセックス王に生まれ変わったようだ。阿修羅のウイルスがきいてきたようだな。」
赤城はこれまでの自分の情けないセックスに極度の劣等感を持っていたのだ。短小、包茎。これまでの人生で一度たりとも、女、を征服することなどなかった。金を出したうえ、あまりの早さにいつも、せせら笑いを浴びせかけられたのだ。それ故、ほとんどがマスターベーションで性欲をするのが常だった。
しかし今回は違った。
自分の身体にエネルギーが無尽にわいてくるように感じるのだ。
貧弱だったペニスが、ビール瓶のように巨大な膨張をするのだ。
自分も驚いたが、相手の女はもっと驚喜した。
本能のままに何度も射精したが、いつものように陰茎は情けなくしぼまなかった。何度も何度も彼女を突き上げることが出来た。
遂に3度目の絶頂で彼女は失神したのだ。
赤城は生まれて初めて、征服感を味わった。

今までの赤城とは一変してしまった。
自信たっぷりに、女を品定めするような目つきで歩いていく。
赤城は秀才だった。中学、高校、と彼の学力にかなうものはいなかった。ただ、優等生にありがちな、女性恐怖症の一人だった。
東大に楽々パスした秀才でも、学閥に反応しない女は必ずいるものだ。
何気なく知り合った、純情そうなお嬢さんから、初めてベッドを共にしたとき、緊張のあまり、ズボンを脱ぐ時に射精したのを見られてしまったのだ。
彼女は、純情そうなだけで男性遍歴は、そこらの娼婦より上だった。
彼女は、ばつの悪そうな顔をしてﾌﾟﾘﾝﾌﾟﾘﾝの前を精液でぬらしている赤城をみるなり、屈託なく大笑いをしてしまったのだ。
それ以来、赤城は金でしか、女と接することはなかった。
そんな自分が女を失神させることが出来たのだ。
彼の心は、自分の陰茎と同じようにいきり立っている。

二日間の間、女を見つけてはセックスを続けた。
50万の金はあっと言う間に使い果たし、自分の口座から何百万かおろして使っている。赤城は金持ちなのだ。
「俺はいきている。」
彼はそうつぶやいた。
これまでにない幸福感と、満足感を腹一杯満喫しているのだ。
疲れはほとんどなかったのだが、ふと足下がふらついた。
ほとんど2日寝ていないことに気づいた。

こまれでにない上機嫌で高級ホテルへ向かった。

どのくらい眠ったのだろうか。
赤城は、日の光を感じて目が覚めた。
いつもより、強烈な光だった。
時計を見てみるともう朝の10時だ。
やけに頭が重い。
昨日の爽快感がなかった。
なかなかベッドから起きあがれなかった。
やっとの事で起きあがる。
洗面所へいく。
鏡を見て、クラリときた。
「ぐぐぐっっっ・・・」
そこには赤城のいつもの顔がないのだ。
のっぺりとした緑色っぽい鱗のような皮膚。
目は極端に離れ、鼻はつぶれたように穴だけが見える。
口はぱっくりと大きく裂け、舌がちろちろと動いている。
蛇かトカゲの顔だ。
手を見てみる。なんと鱗がびっしりだ。
赤城はあまりのことに、その場で失神してしまった。

ドアをノックする音で我に返った。
ガチャリと音がして、人が入ってきた。
掃除のおばさんだった。
もうチェックインしたと勘違いしたようで、そのまま洗面所へ入ってきた。
いきなり赤城と顔を合わしてしまった。

ホテル中に響きわたるような悲鳴がとどろいた。
赤城は部屋から飛び出した。
どたばたしている割には動きが素早い。
ホテルのあちこちで悲鳴が沸き上がる。
赤城はタオルを頭からかぶり命がけで逃げ出した。

新宿は人が多すぎて、奇妙な格好をした赤城を気にする人などいなかった。
赤城は必死で人目をさけながら人のいないところを必死で探した。
「阿修羅の奴め。だましやがったな。こんな化け物に変身するなど一言も言わなかったぞ。そうだ。彼奴なら元の姿に戻れるに違いない。」
赤城は麻布のシェルターまでどうやって帰ろうかばかり考え始めた。
一時間ほどうろうろしたが、だんだん背骨が曲がってくるような感じがする。頭の中は、阿修羅へ罵倒ばかりが続く。
頭の芯が痛い。だんだん化け物に変化していくようで、涙が出てきた。
「こんな化け物になりたくない。死んでもいいから人間に戻りたい。」
全身にぎしぎしと痛みが走る。
「阿修羅の奴、殺してやる。八つ裂きにして喰い殺してやる。」
赤城は半分トカゲの化け物になったまま、公園の隅にうずくまってしまった。

どこをどう走ってきたのか、あまり覚えていないのだが、やっと見覚えのある会長のシェルターのある場所まで来た。会長宅の玄関には、環視カメラがついており、腕利きの警備員がいるはずだった。この姿で現れたら、直ちに射殺されるのは間違いなかった。さきほどまで月が出ていてあたりを照らしていたのだが、むら雲が急に月を隠してしまった。赤城は警備のうすい2メートルほどの壁を軽々とジャンプした。庭木の茂みに隠れるとそのまま四つん這いで、シェルターの入り口まで素早く移動する。二本足で立つより、四つん這いで行動する方が敏捷になってしまっているのだ。入り口までたどり着いたが、ここは声紋と指紋のオートキーになっており、今の赤城では入るすべがなかった。

赤城ははいつくばったまま、入り口から動こうとしなかった。阿修羅が出てくるまでここで待つ覚悟を決めたのだ。

そう考えて、隠れ場所を探そうとしたときである。いきなりシェルターのドアが開いた。

「赤城か。待っていたぞ。中に入いれ。」

阿修羅の声だった。

赤城は言われるままにシェルターの中へ飛び込んだ。

無菌室に赤城と阿修羅がいた。分厚いガラスのぞき窓がありそこには会長の顔が見える。

赤城は苦しそうに立ち上がっている。しっぽが生えてきているので、二本足ではバランスがとりにくいのだ。しかし、自分は人間だという思いだけがきえないのだ。

「阿修羅、よくも騙してくれたな。俺はお前を喰い殺すことだけを考えてきたのだ。」

赤城は今にも飛びかかろうとしている。

「まあまて、赤城。会長も見ているんだぞ。お前の変身がこんなに早いとは思わなかったが、トカゲ男とはな・・・くっくっくっ」

アスラは思わず笑ってしまった。

その笑いは美しく、そして残酷だった。

「きさまー。殺してやる。いや、その前に俺を元の姿に戻せ。」

アスラはあくまでも優雅に答える。

「赤城、お前は姿こそトカゲ男だが、もう1年後に死ななくていいんだぞ。それに常人にはない能力を身につけた。普通の人間などお前にかなうものなど、いないんだ。それと、頭の中は人間のままだし、完全にはトカゲにはならないんだ。私のウイルスは、どうもかかった人間の性格がどうも全面に出てくるらしい。トカゲの能力と姿を得たのはお前自身の問題なのだ。」

うーと赤城はうなったままだった。

アスラはまだ続けた。

「赤城、お前は俺の分身でもあるんだ。俺のゆうことを聞け。いいことがあるぞ。しかしどうしても元の姿に戻りたかったら、私の力ではどうしようもないのだ。たった一つだけの方法は、神々の肉を喰らい、神々の血をすすればいいのだ。まあ、これはお勧めしないけどな。」

アスラはそういうと、タバコを取り出して火をつけた。

旨そうに煙を吐き出す。

赤城は黙ったままだった。

「よく考えるんだな。」

そういい残すと部屋から出ていった。

赤城はじっと考えたままだった。

そしてぽつりとつぶやく。

「神々の肉と血だな。そうすれば戻れるんだな」

赤城は四つん這いになって、部屋から出ていった。

ウィルス

会長の稲川は、のぞき窓から部屋を出ていく赤城を見つめていた。
その目は悲しみに満ちていた。
その横に、美しいアスラがいた。
彼の目は恐ろしいまでに澄んでいた。

アスラと会長は特別室にいる。
室内はゴージャスな調度品でいっぱいである。
様々な装置が付いてあり、地上で何があっても、5年は暮らしていける様になっている。
稲川は、革張りの椅子に腰を下ろしている。
目の前にはアスラが座っていた。

「アスラよ。少し私の話を聞いてもらえないだろうか。」
ブランディを口に持っていきながらアスラは静かにうなずいた。
稲川は考え考えながら淡々と話し始めた。
「私は老人だ。様々な延命処置を受けているが、もう少ししか生きないだろう。」
稲川の身体は、現代医学の粋を集めて生体移植をおこなっている。
「私は私なりに考えてみた。神とアスラのことをな。
私は、まだ若い頃、戦争を経験している。一兵隊として中国大陸にいたのだ。その時、数多くの人間を殺した。もちろん戦争だからだ。その時、私は自分の中に悪魔がいることを知ったのだ。人間はいとも簡単に悪魔になれるのだ。
こんな生き物が地球上にいるだろうか。そう、人間だけだ。だが、私は思ったのだ。人間は進化の途中にあるのだと。まだ未完成だから、愚考を起こすのだと。
そして私は、自分の生きているうちにその証を見てみたかった。しかし結局見つけることが出来なかった。
アスラよ、人類は進化することはないのか。」

アスラは静かに答える。
「人類は病気にかかっていたのです。人類がまだ猿だった頃、彼らの一種族が伝染病にかかったのです。大脳新皮質肥大という病気にです。猿から一気に人間になりました。ダーウィンの進化論は残念ながら根本から間違っています。大脳新皮質の異常な発達は進化と呼ばれるものではなく、新種のウイルスのせいだったのです。しかし、実は人間だけではありません。地球上の全ての生き物がこのウイルスに感染していたのです。後生の人間はその変化を進化と呼びました。しかし、進化などはどこにもありません。全てがウイルスによる変化に過ぎなかったのです。変化を進化とは言いません。
さいころを六回振って最初に1が出る。その次に2が出る。そしてその次3が出たとき、人間は次に4が出るはずだと考えました。それが進化の真実です。しかしこれはただの偶然です。確率のいたずらだったのです。3の次に出てくるのは、誰にもわからないのです。
「なぜ、ウイルスはサイコロを振るのか」
「それは私にもわかりません。ウイルスはある目的の目が出るのをまっているのかもしれません。」
「カンブリア紀の生物も、恐竜も、そして人類もウイルスの振った目のためにうまれ、次に振った目のために滅んでしまったのか。そこには何の脈略もないのか。この世界は原因があって結果が生じているはずだ。神の種の復活は人類への罰のためではないのか。それ故に人類を滅ぼそうとしているのではないのか。」
「確かに、神の種は人類の自殺因子なのかもしれません。人類という突然変異種を駆除するための地球の防衛本能の具現だとも思えるのです。しかし、なぜ人類が誕生したという必然性は全くないのです。人類は地球のためには全く不必要な異種だったのです。このまま行けば地球は人類のために滅んでしまうでしょう。どちらにせよ、ウイルス

はもう一度サイコロを振るつもりなのです。我々がもしこの世界で生き延びることが出来たとしたら、それもまた運命なのかもしれません。」
「アスラよ。ウイルスは神なのか。創造主なのか。」
「そうです。ウイルスこそ本当の神なのです。」
長い話だった。
アスラは静かにブランディグラスをテーブルにおいた。
稲川は、黙ったまま目を閉じていた。
アスラは出ていこうと立ち上がったとき、稲川は尋ねた。
「赤城はどうなるのか。」
アスラは振り向きもせず答えた。
「赤城は、神々の元へ行くでしょう。そして神々を殺そうとするでしょう。昔から、神と悪魔は戦うものと決まっているのです。」
「そうか。それが神と悪魔の本当の関係だったのか。哀れだのう。」
「まさか、神の肉を喰えば元に戻れるなんて言うジョークを信じてはいないと思いますが。」
アスラはニヤリと笑った。そしてクックックッと声を出して笑った。
だんだん笑い声が大きくなる。
美しい声で大きく笑いながらアスラは部屋から出ていった。

悪魔

世界中はパニックに陥った。
醜い悪魔たちが地上に現われたのだ。今まで宗教の中にいた悪魔達がどんどん現れてきた。
人類は、爬虫類が苦手だ。虫もそんなに好かれてはいない。
それは、人類が生まれたての頃の恐怖が、原生意識として脳に刷り込まれているからだ。悪魔などの姿形がそれらの形態をベースにしていることが顕著に表している。
アスラのウイルスに感染したものたちは、個人差はあれ、2～3日は、淫行作用が働いて活力がアップする。その期間が終わると急激に変身する。規則性はないんだが、どうも自分の一番苦手な生き物がベースになっているようだ。
何も知らずに、アスラウィルス感染者と性交した人は、ある朝突然、自分の嫌いな生き物に変身するのだ。実はこれにはちゃんとした理由があった。
異様な姿に変身するのだが、これは擬態なのだ。擬態とは昆虫などが敵におそわれないように姿を変えていることなのだ。人間というのははっきりとした天敵がいない。しかし、本能的に人間が恐怖に思っているもの、それが爬虫類であり、昆虫だ。更に哺乳類でも、狼、熊、など、更に鳥類など、アスラウィルスは人間が、怖がるものを関知して擬態という反応を起こす。これが変身の理由である。これにより、人間の攻撃をかわそうという本来の意味があるのだが、変身した人間は、自分の異様な姿に仰天してたえられずに錯乱状態になってしまっている。しかし、中身は人間である。食事も生理機能も人間のままだ。
しかし、化け物のような姿の者達に、冷静に対応できる人などはいなかった。日本では銃は持てないので、警察が見回りしたり、自営団などが結成されて、戒厳令などが敷かれたりしていた。
外国は持つと直接的だ。悪魔のような化け物に容赦なく銃をぶっ放した。
その結果、悪魔達は次第に組織化していき、食料調達など夜、何人かで略奪したりした。闇に紛れて、集団で行動する異形の集団はまさに悪魔そのものだった。また、変身後は生命力など強力になり、多少の悪条件でもしぶとく生き延びる。銃で撃ってもなかなか死なない悪魔達を見て人間達は完全にパニックに陥った。

外見がトカゲに変身している赤城はいつの間にか、大きな集団のリーダーになっていた。下水道や地下鉄などに隠れ住んでいるのだが、その頭脳は変身後も変わりなかった。彼はまだ人間に戻ることをあきらめてはいなかった。事ある度に「神の肉を食え、神の血をするのだ。そうすれば人間にもどれるぞ。」そう叫んでいた。

人間に戻れるという噂は、世界中の悪魔に変身した者達にあっと言う間に伝わった。あちらこちらで悪魔は集団化して、神々をねらい始めたのだ。

ある時、教会に住んでいた愛くるしい子どもの天使を、厳重な警護をぬって、十人ほどのコウモリやゴキブリ、狼などに擬態した悪魔達がおそった。警備の人間が駆けつけたときには、悪魔達が天使をバラバラに食いちぎって、その肉を食べている最中だったのだ。その時テレビ局の撮影隊がその姿を撮影した。

警備員達は、教会の中で天使がおぞましい姿の悪魔達に喰われてる姿を見て、ヒステリー状態になった。教会の中で散弾銃をぶっ放し全ての悪魔達を撃ち殺したのだった。

その一部始終がテレビに放映された。この映像は世界中に衝撃を与えた。

ハルマゲドン到来と全てのメディアが声高く報道した。

今世界は、神の出現で奇跡的な平和を迎えているのだ。神のウイルスによる死亡者はまだ出ていない。もし死亡者が出始めても今の科学ではウイルスさえ発見できないだろう。戦争も終結し、悲惨な病気が今のところはないのだ。こんな天国のような時が来ることなど人類は考えたことがなかったのに、現実にやって来たのだ。最初は半信半疑な人々も大勢いたが、今では神の時代であることを疑う者などいなかった。

しかし、はっきりと悪魔が敵であることを認知したのだった。悪魔は神を狙っている。悪魔はこの世をまた不幸な地獄へ舞い戻すために出現した。そう全ての宗教者は熱く叫びだしたのだ。遂に本格的な悪魔狩りに各国は動き出した。

神は放浪というウイルスをばらまく作業をまだ続けているが、狭い地域ではその任務が終了して、放浪せずに教会や聖地でとどまっている者達も多かった。彼たちは座禅を組み、または横になり命の終わりを静かに待つだけなのだ。

人間たちは、軍隊を総出動して悪魔狩りに行動を起こした。

悪魔たちも必死だった。

しかし人間たちは悪魔たちの攻撃に容赦はなかった。

軍隊は、今ある最強の武器を装備して、悪魔のすみかを攻撃した。

戦車や、火炎放射器、さらにはジェット機やナパーム弾など全く容赦をしなかった。

悪魔達は、一方的にやられてはいなかった。変身の時に得た特殊能力が人間の攻撃をうち破るときもあった。武器を奪い逆に、軍隊を滅ぼす悪魔達が出始めたのだ。何せ、爬虫類や、昆虫、動物の能力は超能力に等しい。最新の科学力を誇る軍隊さえ、裏をかかれるのだ。

世界中はわずかな悪魔達に翻弄され、少数の神をおそわれては殺されてしまった。神の能力は悪魔達をうわまわっていて、そう簡単には悪魔の餌食にはならないのだが、役目を終えた神々は何故か無抵抗なのだ。何も抵抗せずに目をつぶっているだけだった。神は６６６人以上増えなかった。それどころか、悪魔の襲撃であちらこちらから、殺され食べられた者が少しずつ出てきた。悪魔は確実に増え続けているのだ。

人類はこの事態に恐れおののいたのだ。

１９９９年７月。アメリカのワシントンでホワイトハウスが深夜、かなりの数の悪魔達に占領された。このニュースはすぐさま世界中に知れ渡った。そのテレビの中でトカゲ男が指揮を執っている様子が映し出された。テレビ局のキャスターはこのトカゲ男が悪魔の親玉であることを強調して伝えたのだ。

これが全ての悲劇の始まりだった。

始まり

誰かが、アメリカのワシントンに標準をあわせている核ミサイルのボタンを押してしまったのだ。
狂気のなせる事態だった。
あっという間だった。自動的に報復ミサイルが発射された。
これまでの緊張事態の続いていた世界だったら、その間違いは直ちに修正され、被害は最少限度ですんだだろう。
しかし、今は戦争のない時代だ。誰もが緊張感を失っていたのだ。コンピューターは、報復ミサイルを全世界の主要都市を狙っていた。
さまざまな国の核弾頭ミサイルもコンピューターの自動報復処置として、世界中を飛び回り、きのこ雲を立ち上らせた。
放射能汚染はさまざまな動物の息の根を止めていった。
悪魔たちも同じだった。
神たちもひとたまりもなかった。
世界中に雲が張り巡らし、放射能をたっぷり含んだ雨を降らせた。
その雨は何か月も、降りやむことはなかった。

日本も何時間か後、核ミサイルが東京に落ちた。続いて大阪、福岡、仙台、札幌も壊滅した。まさに世紀末だった。
朝があける頃には、日本は一変していた。
厚い真っ黒い雲に覆われており、朝があけても太陽を見ることは出来なかった。
その時アスラは真のすんでいる富士山の麓の寺院へいた。ここも厳重な警備がしかれていたのだが、人っ子一人誰もいなかった。
日本の神たちは、その使命を終えて座禅したまま息絶えている。残っているのは真一人だけだった。
自分の使命も終かけていた。後はミロクにすべてを任せればよいのだ。

ミロクは本堂の奥の段に座禅を組んで座っていた。眠っているのか、死んでいるのかわからない。
真はミロクを見つめていた。もう1週間も前から座っているのだ。
食べ物も水も、全くとっていない。
この世の中がもうすぐ終わることを感じていた。
どういう形で人類が幕を引くのかはわからなかったが、
夜の大音響と地震で、これで終わりだということは確信した。
ミロクを見つめても、ミロクは何も語らなかった。
真は、これまでの事を考えていた。

しかし、頭の中には幕が掛かっているようにぼんやりとしていた。
初めてミロクの声を聞いたときから、意識ははっきりしていたのだが、考えることが出来なくなっていたのだ。
いつの間にか、一人の女が横にすわっていた。
真は口を開いた。
「アスラ」
真はアスラが横にいることに初めて気づいたのだ。
「真、あなたを愛しているわ」
アスラの声と容姿は女そのものだった。
「いつから女になったのだ。何故ここにいるのだ。私とお前は敵同士じゃないか。」
真の声はだんだん間延びしてきている。もうすぐ命が終わろうとしているのだ。
「あなたと私は元々一つの命なのよ。貴方は、人間種の終わりのために生まれてきたの。私は貴方の役目が終わっ

た後、貴方と協力して、次の命の源にならなければならないの。あなたはもう何も考えられなくなっているのね。それでいいのよ。全ては運命なのよ。後は私に任せて」
アスラは真の手をとり、体を真に預けた。
静かに唇を真に重ねた。
服を脱ぎ、真に絡み付いてきた。
真も、アスラを抱きしめた。
何時間も包容は続いた。
アスラは女そのものだった。胸は大きく膨らみ、今までついていた
大きい陰茎は、ワギナになっているのだ。
アスラは真の陰茎をくわえ始めた。丹念にしゃぶり尽くしている。
真は次第に勃起してきた。アスラは巧みに自分のワギィナへ真の陰茎を差し入れた。
何時間か後、真は雄叫びを上げ射精した。
アスラも、絶頂を迎えともに声を出した。
二人は結ばれたまま動かなくなった。

ぴくりとアスラは動いた。
くちづけをしていた唇を優しくはなす。
アスラはうれしそうに口を大きく開ける。
真の鼻に食いついた。
真は幸せそうに眠り続けている。
アスラは鮮血を浴びながら顔にむさぼり付く。
ばりばりと軟骨を砕く音が響く。
喉元に食らいつく。
動脈が破れ鮮血が勢い良く吹き出す。
アスラは性行為のあと真を食い始めたのだ。
一心不乱に至るところへ食いつく。
肉をくい、骨を食う。まるでカマキリのように
真を食い尽くす。
3時間ほどであろうか。
アスラは真を食い尽くしてしまった。
そのまま眠ってしまった。
アスラのお腹が迫り出してくるのがわかった。
妊娠しているのだ。
アスラは幸せそうな顔をして眠っているのだ。
神と悪魔の子が生まれるのだ。

ミロクは生物ではない。
それ故死ぬこともない。
この人間達からは「ウイルス」と呼ばれていた。
ミロクの思念は此の不思議な命達を見つめていた。
人と呼ばれる生き物は、不思議な考えを持っていた。
たしか「進化」と呼んでいるもので、よりよきものへの変化を信じていたのだ。その原因は大脳皮質の肥大という病気による妄想だった。
そのおかげで、この地球という星に適応しきれなくなったのだ。

38億年前、ミロクはこの星に来た。
小さな流れ星にのって、この星にやって来たのだ。
元々ミロクは時間のエネルギーの具象化である。
生きるとか死ぬとかの概念などない。
此の星にいる命達も元はエネルギーである。
宇宙が突然はじけて、ビックバンと呼ばれるエネルギーの放射が宇宙に散らばった。

此の空気は放射能という恐ろしい大気だが、昔私たちが、酸素という恐ろしい大気を吸えたように彼らも適応していくだろう。

アスラの陣痛が始まった。
体中が蠕動している。
しだいにアスラの身体は風船のように膨らんでいった。
皮膚がぱんぱんに膨らんでいくと、
パンとはじけた。
それと同時に小さな蜘蛛の子のような生き物があふれ出てきたのだ。

小さな虫みたいな生物は、みんなどこか行ってしまった。

完